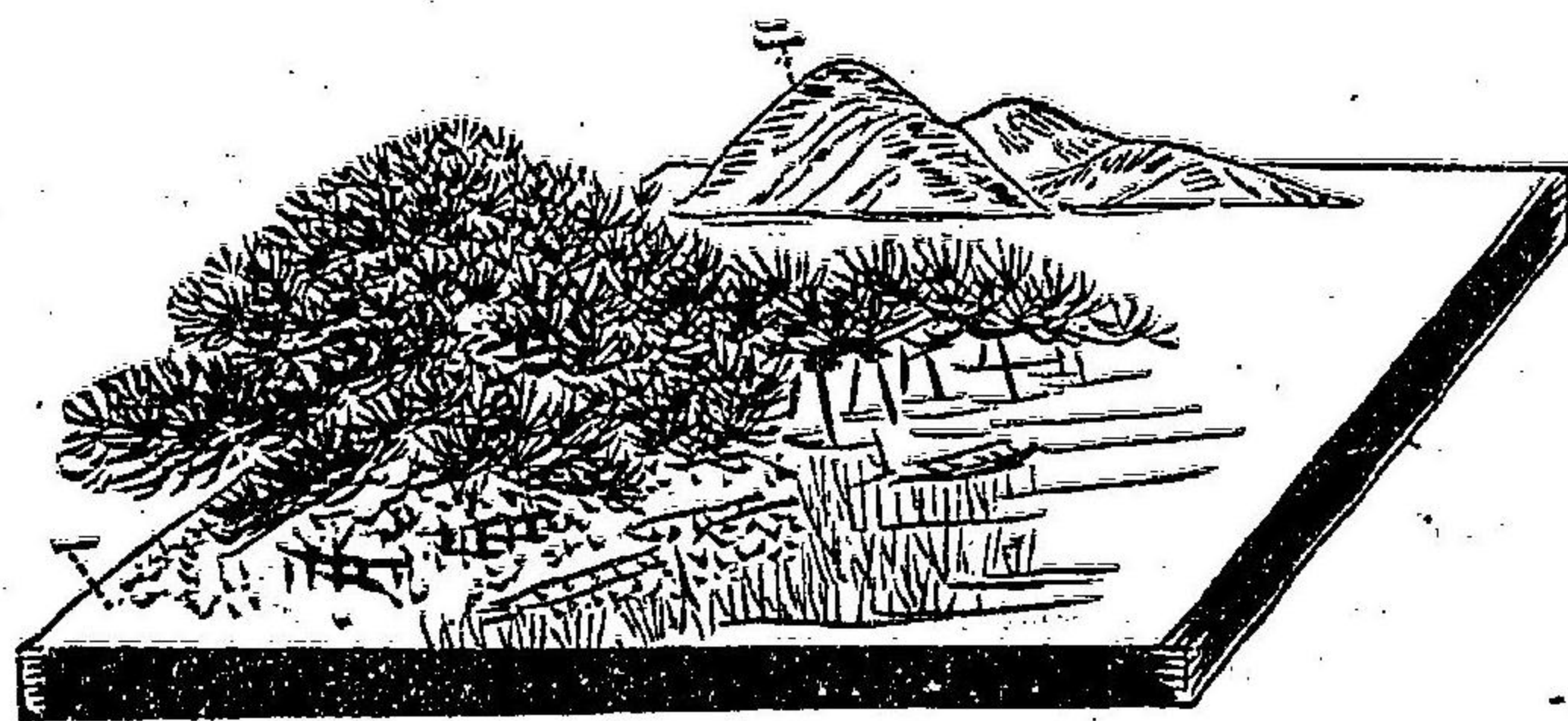


近江 唐崎の景

唐崎の景を造らんとするには、圖の如く壹印の岡を造りて、岸の石垣は眞石の小なるものを撰みて之れを疊み、松の古木にして枝條の蔓延せしものを撰みて植へ松の根廻は柵を造りて根幹に銅製の小社を置き、松の支柱には杉箸の古きものを用ひて、水邊には龍藻を植込べく、又二印の遠山は石にて低く造るべし水面は御影、根岸、天神等其鉢盤の色と異なりたるものを用ゆべきなり

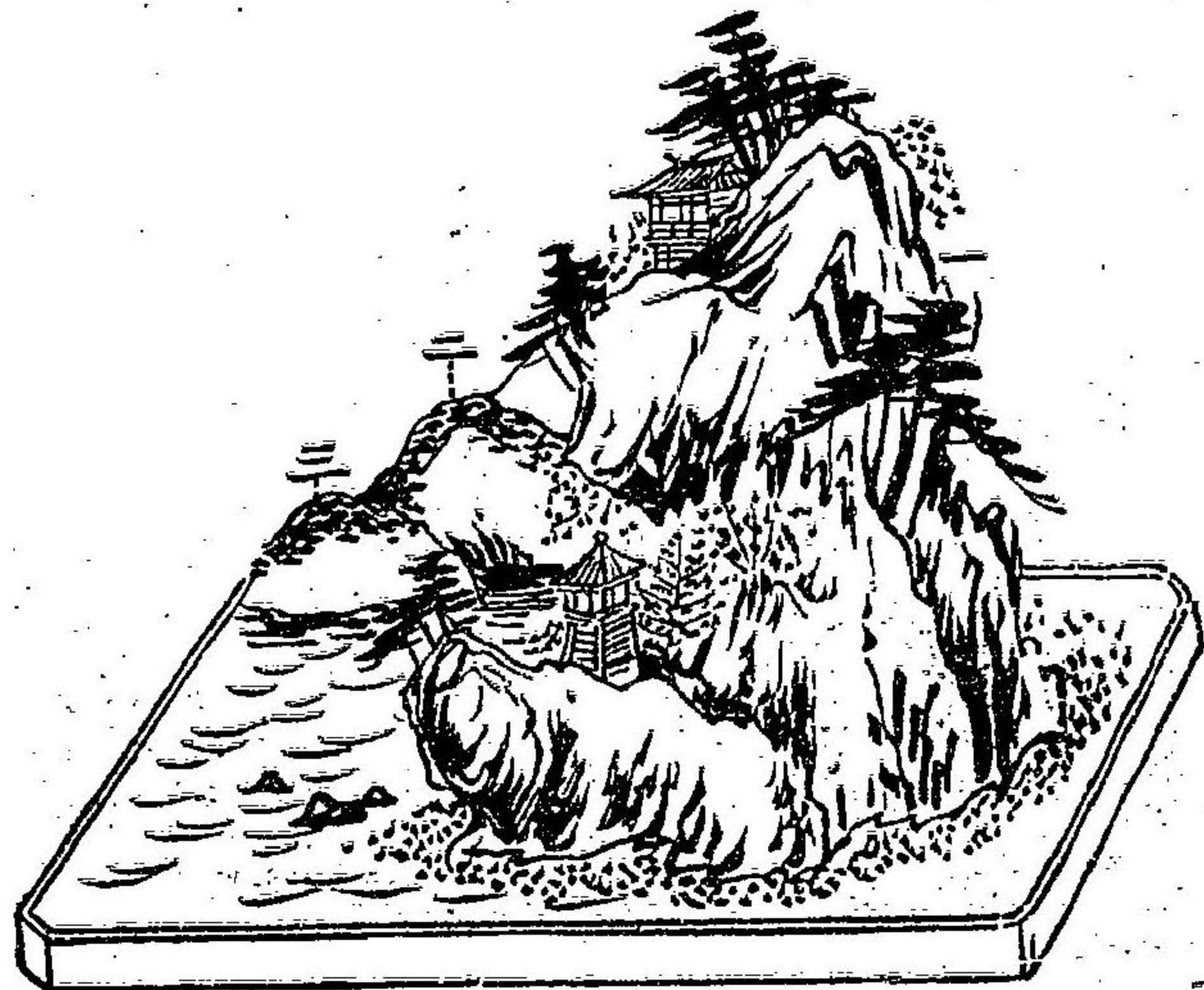
唐崎の景



近江 石山寺の景

石山寺の景を造らんとするには、先づ圖の如く壹印の山を黒崖にて半分以上造りて、其上はけとふ土を用ひ苔をし、山下の岸邊は眞石の小砂利を敷くべく、樹木は松、杜松、杉、玉杉の類及び槭樹等を植込み、堂宇燈臺は銅製若しくは焼物を用ひ、二印三印の遠山はけとふ土にて低く造りて苔を附し、水面は御影、根岸、天神等其鉢盤の色に應じて、配合の能き小石を用ゆべきなり

石山寺の景



近江 筆捨山の景

筆捨山の景は古法眼の筆意にて此圖を示したるものにて、此圖を造らんとするには先づ圖の如く壹印の山二印の山は石を撰みて造り、三印の山はけとふ土にて造り之に苔を附し、樹木は松、檜、槲等を植込み、五印の遠山は又石にて造り、六印の岡はけとふ土にて造りて、地こぶは苔を附し、平地は川砂を敷き、屋後の地こぶへは金明竹を植へ、家屋は焼物或は銅製を用ひ、岸邊に龍藻を植へ水面は根岸、天神、御影等適宜に用ひべきなり

筆捨山の景



陸奥 松島五大堂の景

松島五大堂の景を造らんとするには、圖の如く壹印の山及び二印の山を黒崖にて半分程造り上げ、其上はけとふ土にて造りて苔を附し、樹木は松の大小を植込み、壹印の橋際に小なる黄楊木を植ゆるは大に趣味あり、又後面の山は石にて低く造るべく、堂宇及び橋は焼物にても銅製にても宜ろしく、壹印の山の水際は苔を附し、水面は御影、根岸、天神等其鉢盤に應じて適宜に用ひべきなり

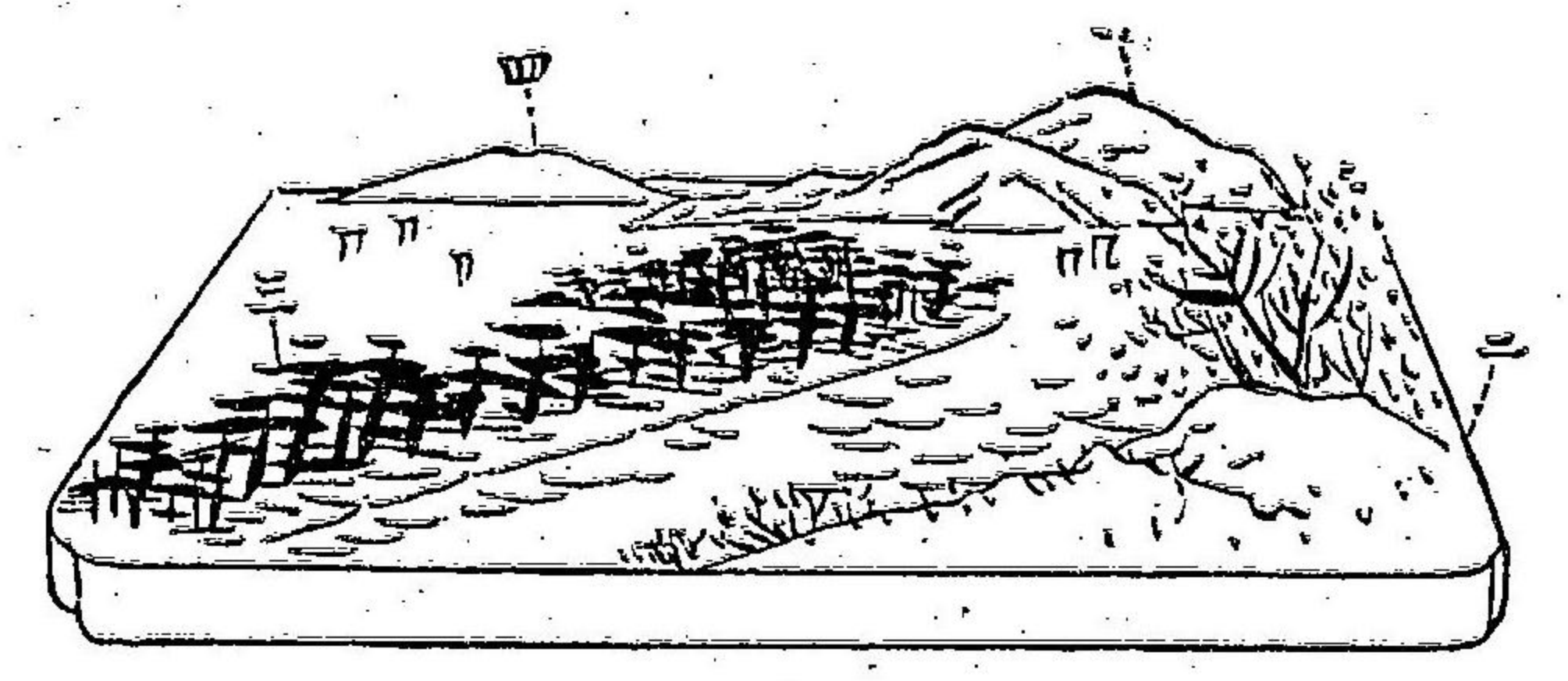
松島五大堂の景



丹後 天の橋立の景

天の橋立の景を造らんとするには、圖の如く壹印の山を低くけとふ土にて造りて苔を附し、次に二印の山を又けとふ土にて造り黄楊木又は樺を三本程植込みて又苔を附け、夫より三印の海中へ突出した松並木を造る、而して之れに植込べき松は極く小なるものを撰みて用ゆべく、四印の遠山は石を撰みて極く低く造るべく、水面は御影の小石を用ひて後面は小に前面は粗大なるを用ひ、遠帆はゴム製のカラ若しくはカフスの不用品にて造るべし

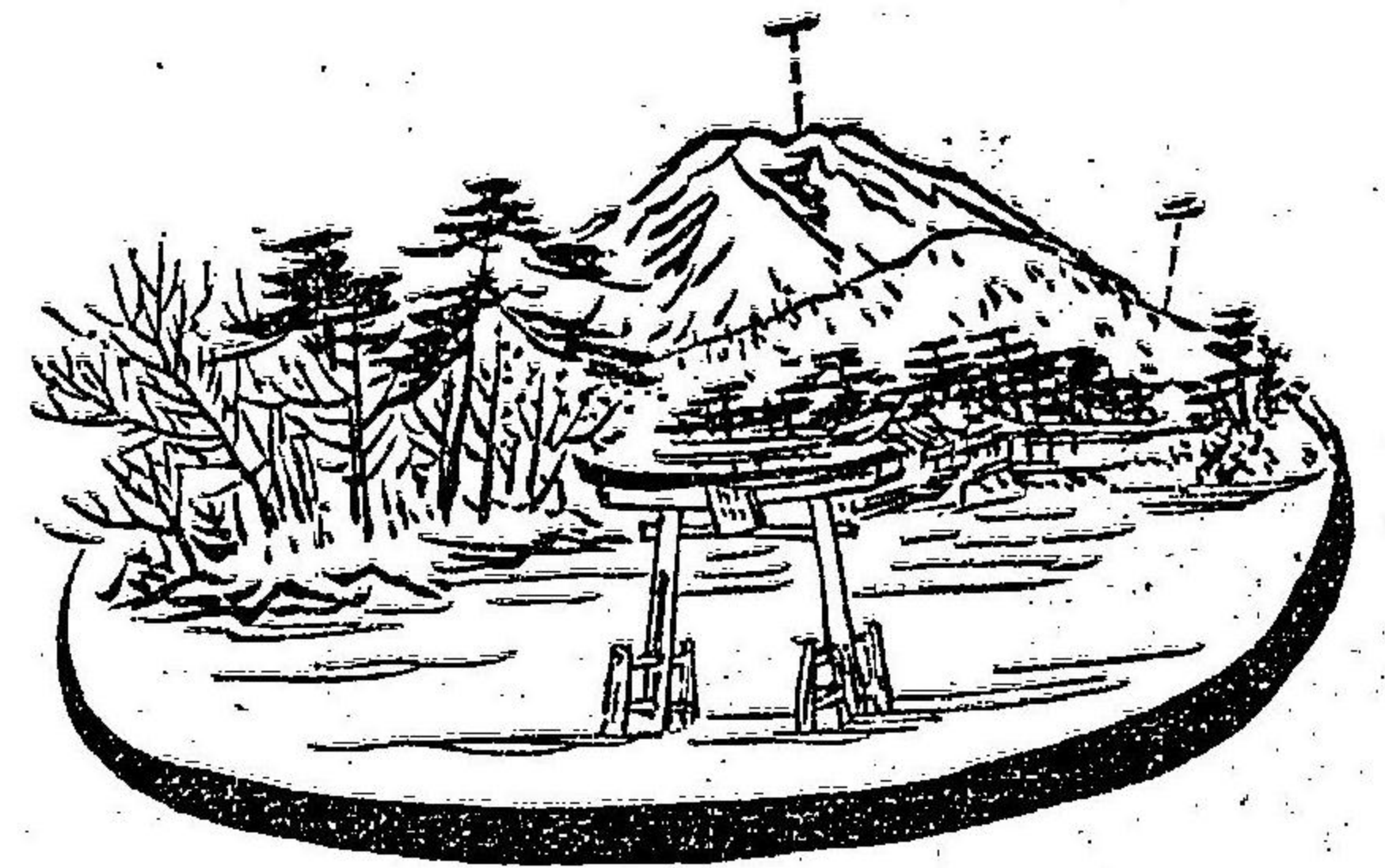
天の橋立の景



安藝 宮島の景

宮島の景を造らんとするには、先づ圖の如く壹印の山を石若しくはけとふ土にて造り、次に二印の山をけとふ土にて造り苔を附して後ち岸を造る、而して社殿は木造り若しくは銅製を用ひ、其後部に小なる松を植込むべし、又前部の植込は松、槭樹等を植へ海中の鳥居は木製にて極く大なるものを撰み用ゆべく、水面は御影、根岸、天神等を鉢盤の色に應じて適宜に用ゆべきなり

宮島の景



下野 日光今市杉街道の景

日光今市杉街道の景を造らんとするには、先づ杉の大小數十本を整へ置き、壹印二印の兩側の前面へ大なる杉を植込み、漸次奥へ至るに従ひ小なる杉を用ひて、斜めに中央の道路を兩側より狭むるときは、道路は奥に進むに従ひて狭まるゆへに、自然深遠なる風致の顯るゝものなり。故に斯る森林を造らんとするには、總べて此點に注意すること肝要なりとす。又道路は川砂を敷くべく、杉林の間は苔を附すべきなり。

日光今市杉街道の景



紀伊 磯間浦の景

磯間浦の景を造らんとするには、圖の如く前面の地こぶを高く造りて、次に岸邊を造りて共に苔を附し、樹木は松、杜松、杉の類を用ひ、堂宇は焼物或は銅製にて宜ろしく、水面は根岸、天神、御影等適宜に用ゆべきなり。

磯間浦の景



山城 宇治川の景

宇治川の景を造らんとするには、
圖の如く壹印、二印、三印の山
をけとふ土にて造り苔を附し、
四印の遠山は石にて低く造り、
五印の地こぶは高く造りて、六
印の岡を造りて杉、雪柳等を植
へ其他は松黄楊木の類を植ゆべ
く、岸邊の杭は古木の晒たるも
のを撰みて用ゆべく、水面は御
影、根岸、天神等の小石を適宜
に用ゆべきなり

宇治川の景



紀伊 和歌の浦の景

和歌の浦の景を造らんとするには、
先づ圖の如く二印の山及び其岸邊
をけとふ土にて造り、山は苔を附
し岸邊は川砂を敷き、樹木は松の
古木を撰みて植ゆべし、堂宇は燒
物にても銅製にても宜ろし、又壹
印の遠山は石にて造り、遠帆はゴ
ム製のカラ、カフス若しくは人造
象牙のヘダ等にて造るべく、水面
は御影、根岸、天神等適宜に用ゆ
べきなり

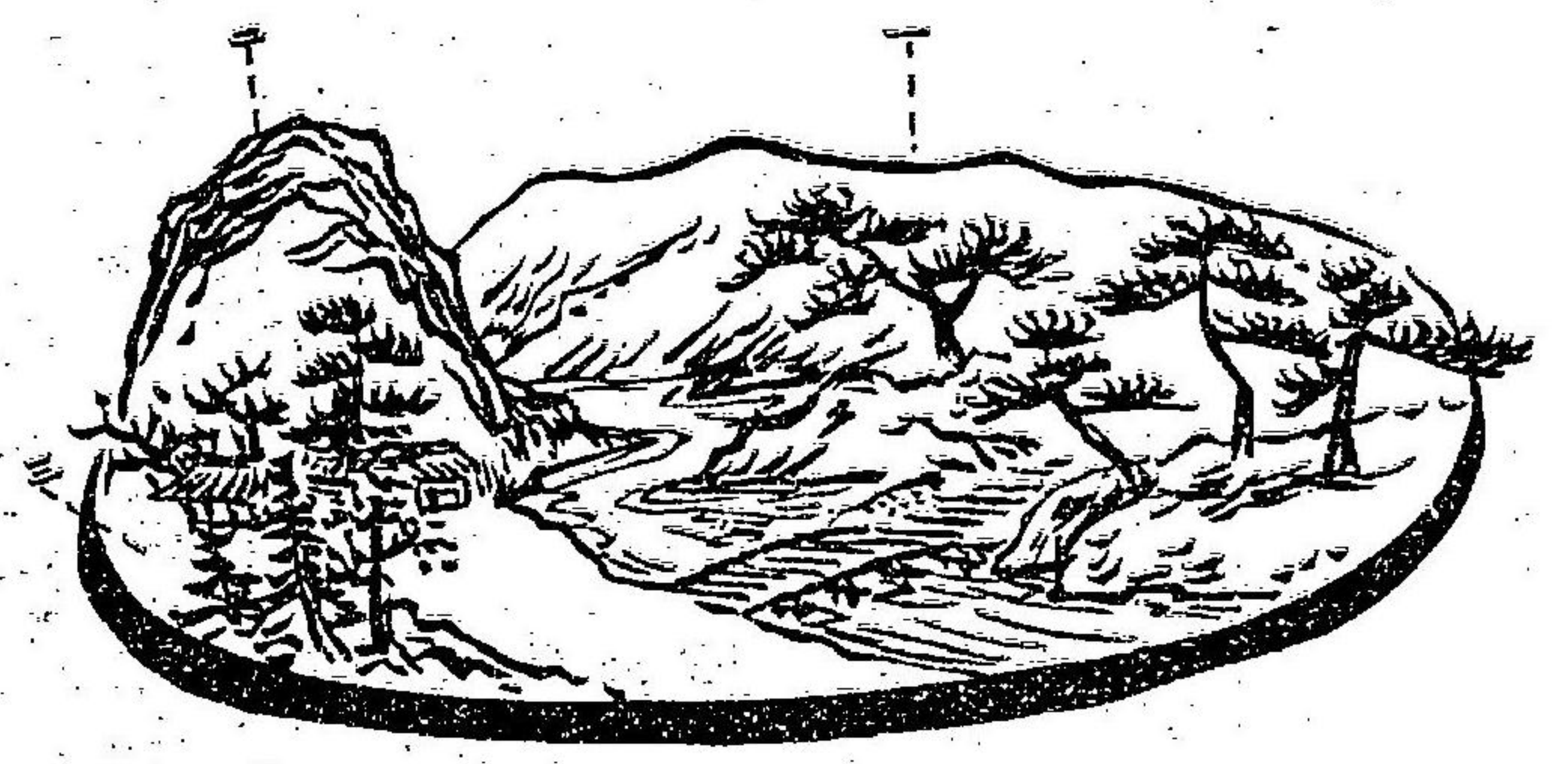
和歌の浦の景



遠江 濱名橋の景

濱名橋の景を造らんとするには、
岡の如く、壹印の山を前面へ向つ
て低くけとふ土にて造り苔を附し
又道路は川砂を敷くべく、次に二
印の山を高く造りて、三印の岡に
至る地こぶは少しく高く造りて苔
を附し、平地は川砂を敷くべく、
樹木は松、杉、榎等を用ひ家屋及
び架橋は焼物を用ゆべし、而して
水面は御影、根岸、天神等適宜に
用ゆべきなり

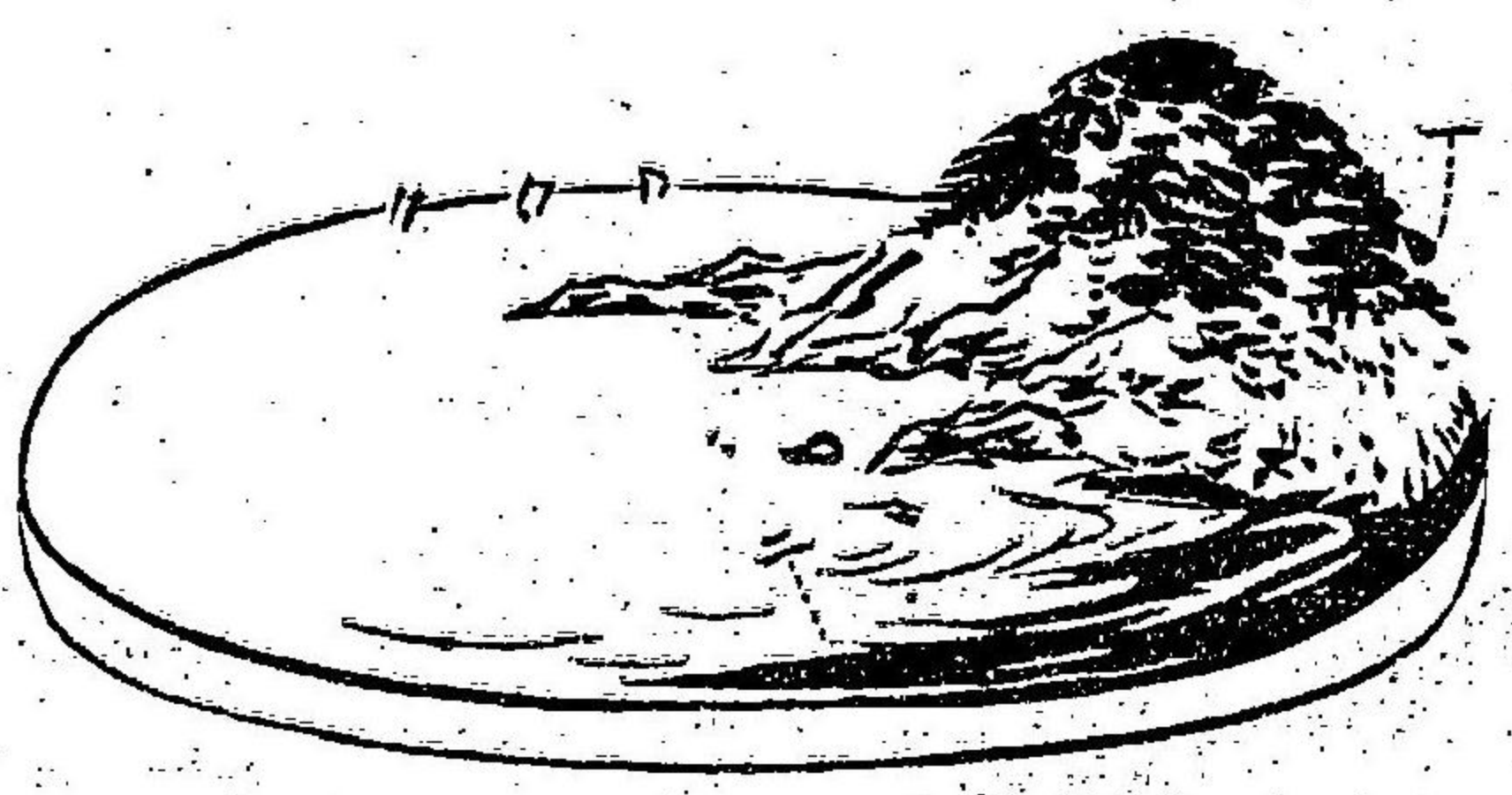
濱名橋の景



攝津 和田岬の景

和田の岬の景を造らんとするには、
先づ岡の如く壹印の山をけとふ土
にて造りて苔を附し、之れに小松
を植込み、次に二印の岸邊を川砂
にて造り、眞石を斑點に置き、遠
帆はゴム製のカラ、カフス等の不
用品にて造り、水面は御影、根岸
天神等其鉢盤の色に應じて、配合
の宜ろしきやふ、適宜の小石を用
ゆべきなり

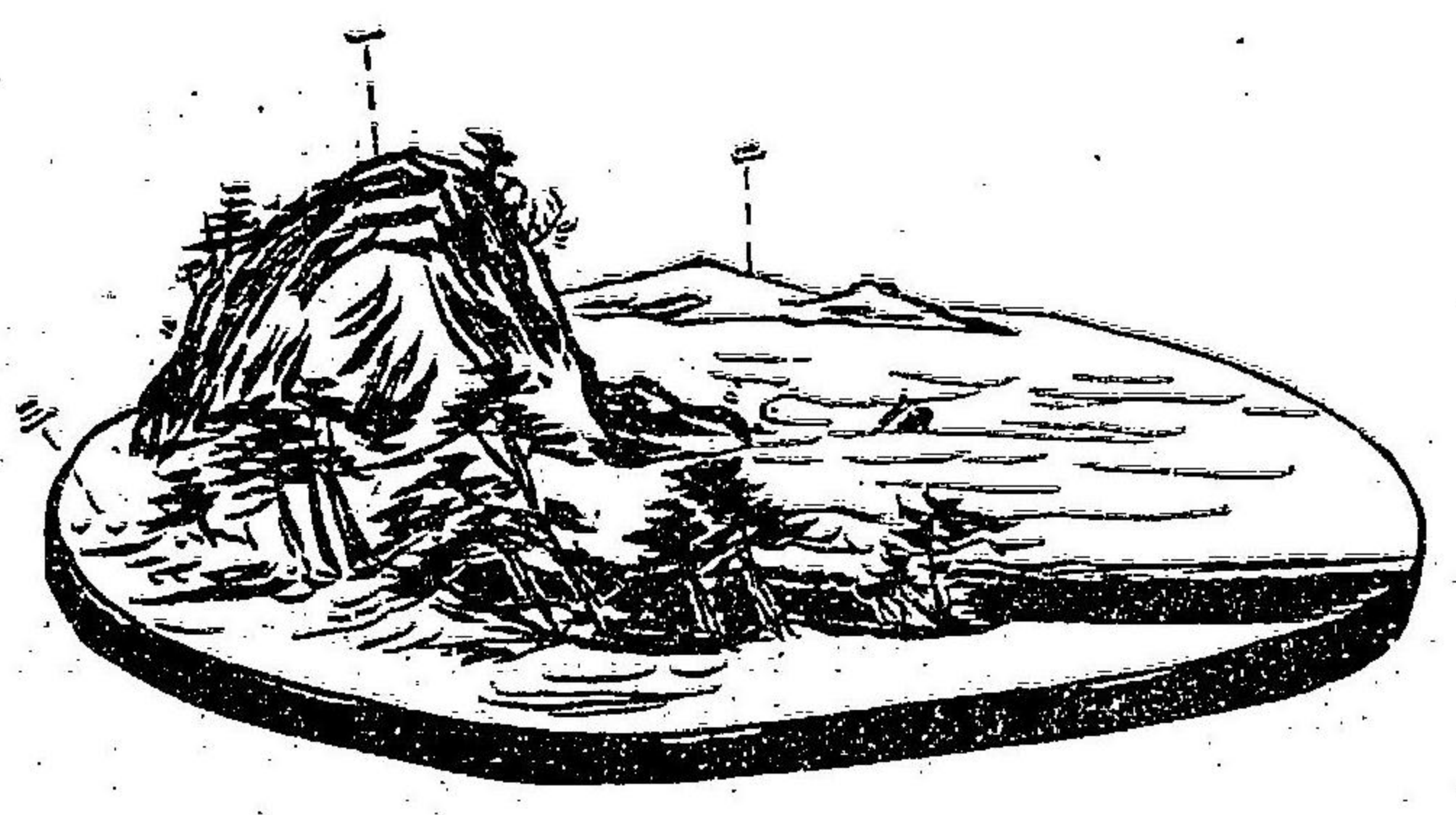
和田岬の景



常陸 大洗海岸の景

大洗海岸の景を造らんとするには、
圖の如く壹印の山をけとふ土にて
造りて苔を附し、二印の遠山は石
にて低く造る、而して三印の海岸
を又けとふ土にて造り松を並木の
如く植込み苔を附し、水際は川砂
を敷きて水面は天神、根岸、御影
等適宜に用ゆべく、又一印の山に
は小松、黄楊木の類を植ゆへし

大洗海岸の景



相模 七里ヶ濱の景

七里ヶ濱の景を造らんとするには、壹
印の山を石又はけとふ土にて造り苔を
附し、次に二印の山をけとふ土にて造
りて樹木を植ゆ、樹木は樟、松、杜松
の類を用ゆべく、三印の道路は川砂を
敷きて其兩側は苔を附すべく、四印の
富士山は焼物にても石にても又土にて
も低く造るべし、遠帆はゴム製のカラ
カラス等の不用品にて造るべく、海中
の岩は磯崖、黒崖等の類にて造り、水
面は御影、根岸、天神等其鉢盤の色に
應じて適宜に用ゆべきなり

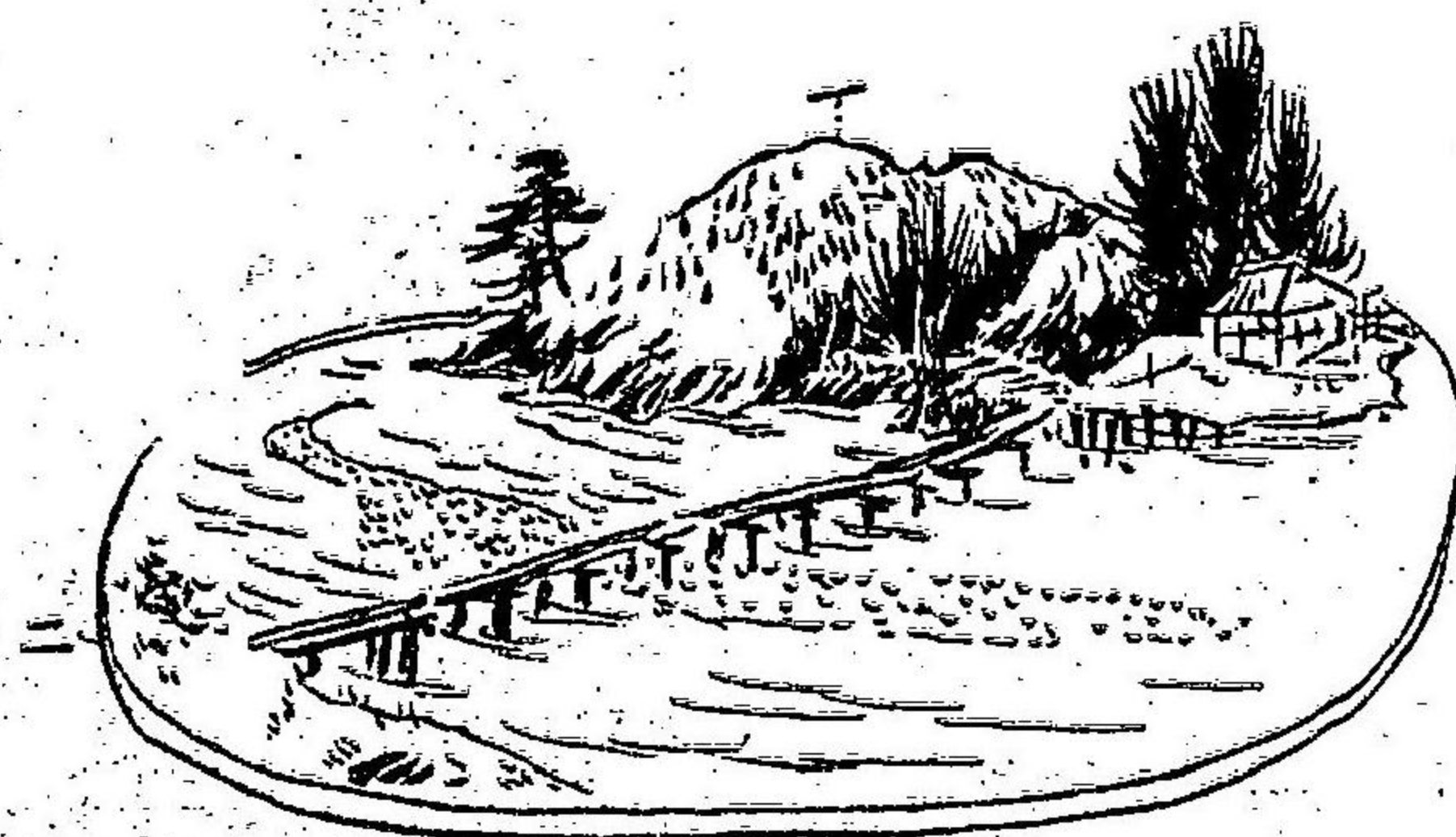
七里ヶ濱の景



岩代 阿武隈川の景

阿武隈川の景を造らんとするには、
 圖の如く壹印の山をけとふ土にて
 造り松、杜松の小なるものを植へ
 苔を附し、次に二印の岡を造りて
 杉、玉杉の類を植込み川砂を敷き
 三印の岡はけとふ土にて造りて苔
 を附すべく、河原は粗大の川砂を
 用ひて、架橋は木にて造るべく、
 水面は御影、根岸、天神等適宜に
 用ゆべきなり

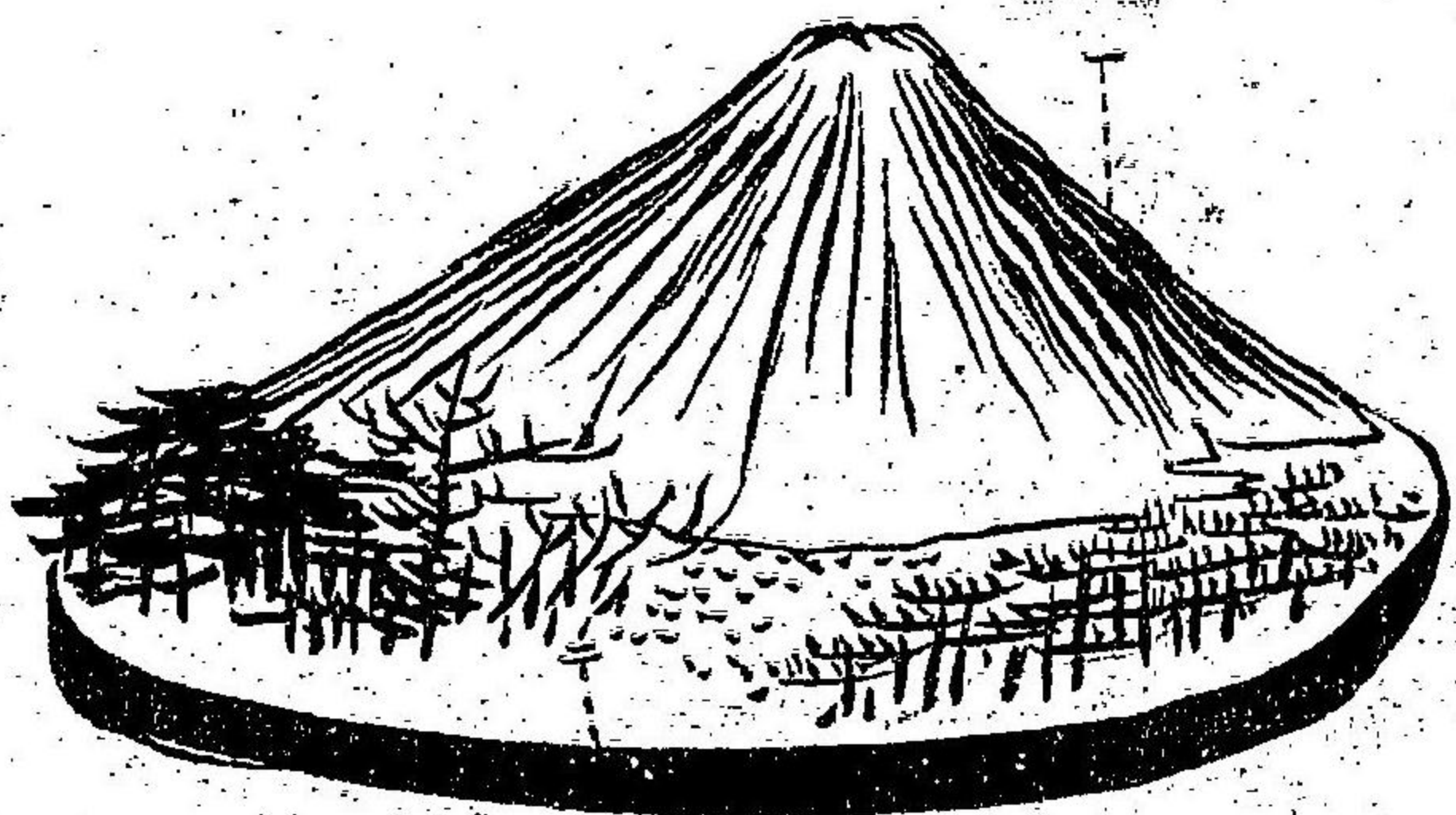
阿武隈川の景



駿河 宮原の景

宮原の景を造らんとするには、
 圖の如く壹印の富士山をけとふ
 土にて高く造り、之れに干苔と
 青苔とを附して半白の斑點を造
 るべく、次に二印の地こぶ兩側
 を少しく高く、中央は低く造り
 て苔を附し、樹木は松、樟等を
 植ゆべし

宮原の景



大和 保津川の景

保津川の景を造らんとするときは、先づ圖の如く壹印の山を半分程黒崖にて造り、其上をけとふ土にて造り上げ苔を附し杉、玉杉の類を植込み、二印の山はけとふ土にて造りて松、杜松の類を植へ苔を附し、前面の岸邊は川砂を敷き眞石の大小を置き、水面は御影、天神、根岸等の小石を適宜に用ゆべく筏は黒もじにて造るも又焼物を用ゆるも何れにても宜ろし

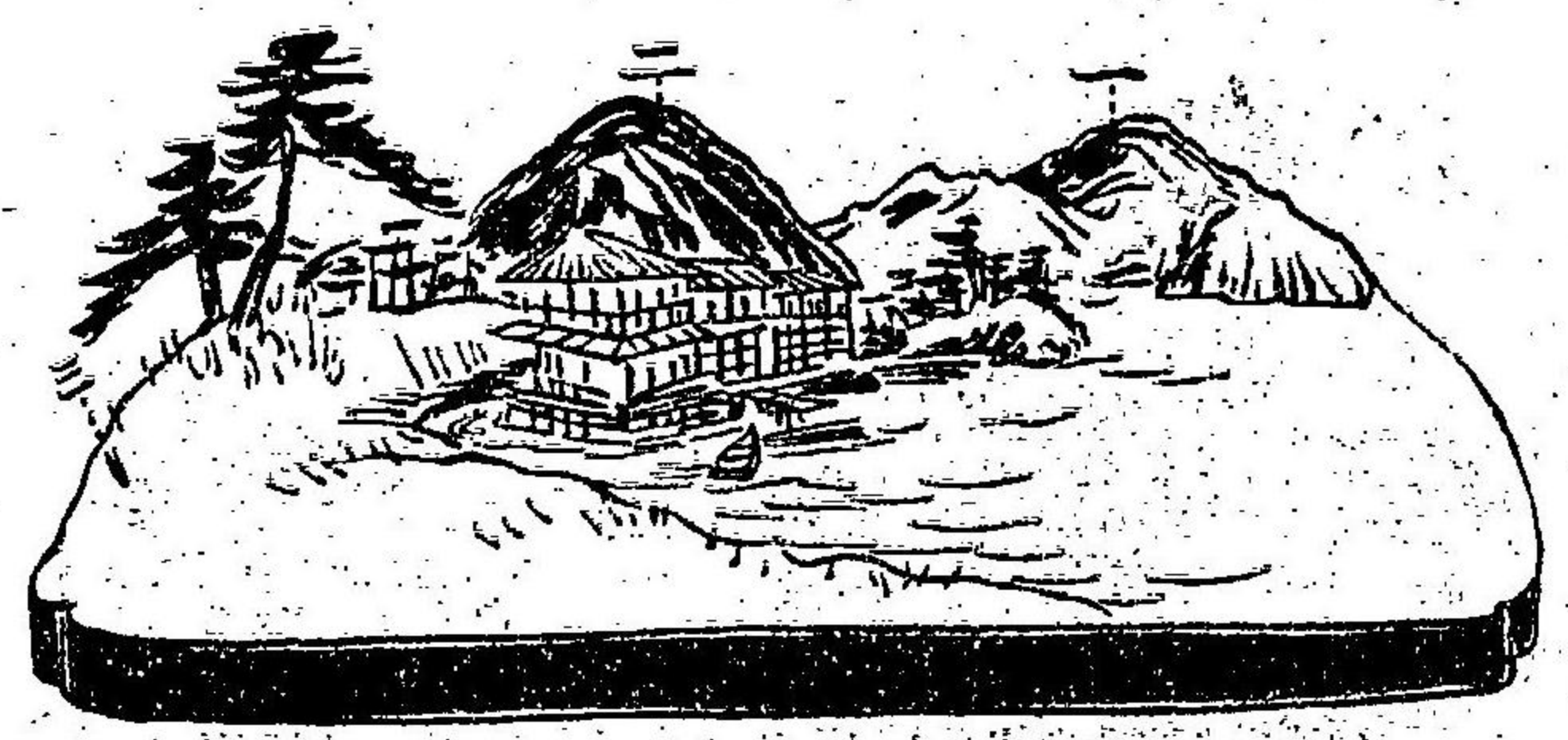
保津川の景



下野 日光中禪寺湖の景

日光中禪寺の湖の景を造らんとするには、先づ圖の如く壹印の山をけとふ土にて低く造りて苔を附し、次に二印の山をけとふ土にて高く造りて小松或は杜松の小なるものを植へ、三印の岸邊は地こぶを高く造りて松、杜松の類を植ゆべく、家屋は銅製にても焼物にても可なり、水面は御影、天神、根岸等其鉢盤に應じて適宜に用ゆべきなり

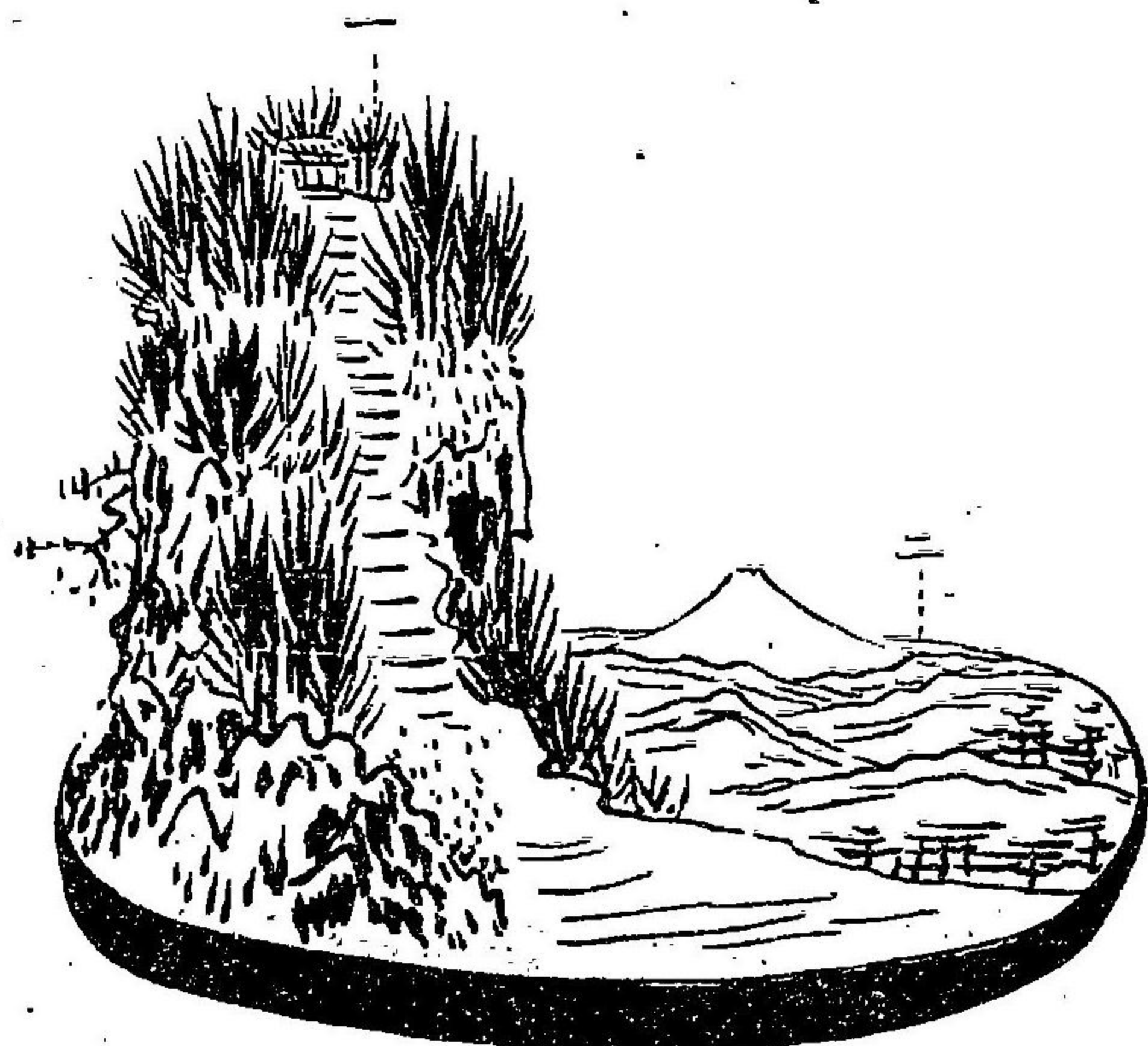
日光中禪寺湖の景



山城 愛宕山の景

愛宕山の景を造らんとするに
は、先づ圖の如く壹印の山を
黒崖とけとふ土にて造りて、
杉、楓等を植へ坂は焼物若し
くは川砂を敷きて造り、次に
二印の遠山は順次低く造りて
松の小なるものを植ゆべく坂
下の地こぶは川砂を敷くべし
社殿は焼物にても銅製にても
宜ろし

愛宕山の景



攝津 有馬屏風岩の景

有馬屏風岩の景を造らんとするには、
圖の如く壹印の山を黒崖にて半分程
奥へ屏風の如く折曲げて造り、其上
をけとふ土にて造り苔を附し、次に
二印の山も同じく屏風の如く黒崖に
て造り、其上はけとふ土を用ひて苔
を附し、後面の遠山は低く石若しく
はけとふ土にて造る樹木は松、杜松
の類を植へ、岸邊は川砂を敷くべく、
水面は御影、根岸、天神等鉢盤の色
合に應じて適宜に用ゆべきなり

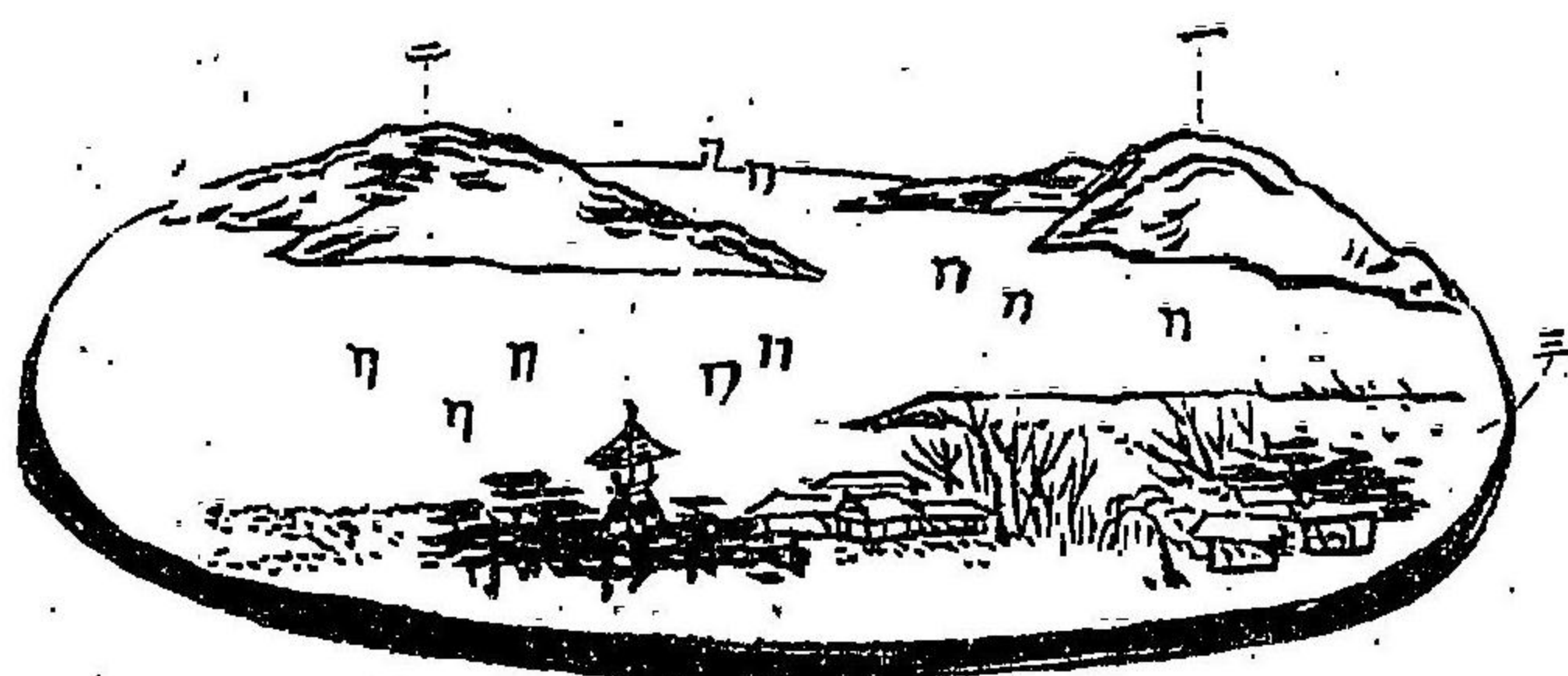
有馬屏風岩の景



攝津 新清水の景

新清水の景を造らんとするには、
 圖の如く壹印の遠山を石若しくは
 けとふ土にて造り、次に二印の山
 を又けとふ土にて造り苔を附し、
 三印の岸邊は川砂を敷くべく、樹
 木は松、杜松の類及び檜、黄楊木
 等を植へ込み、人家及び燈臺は燒
 物若しくは銅製を用ゆべし、遠帆
 はゴム製のカラ、カフス等の不用
 品にて造るべく、水面は御影、根
 岸、天神等適宜に用ゆべし

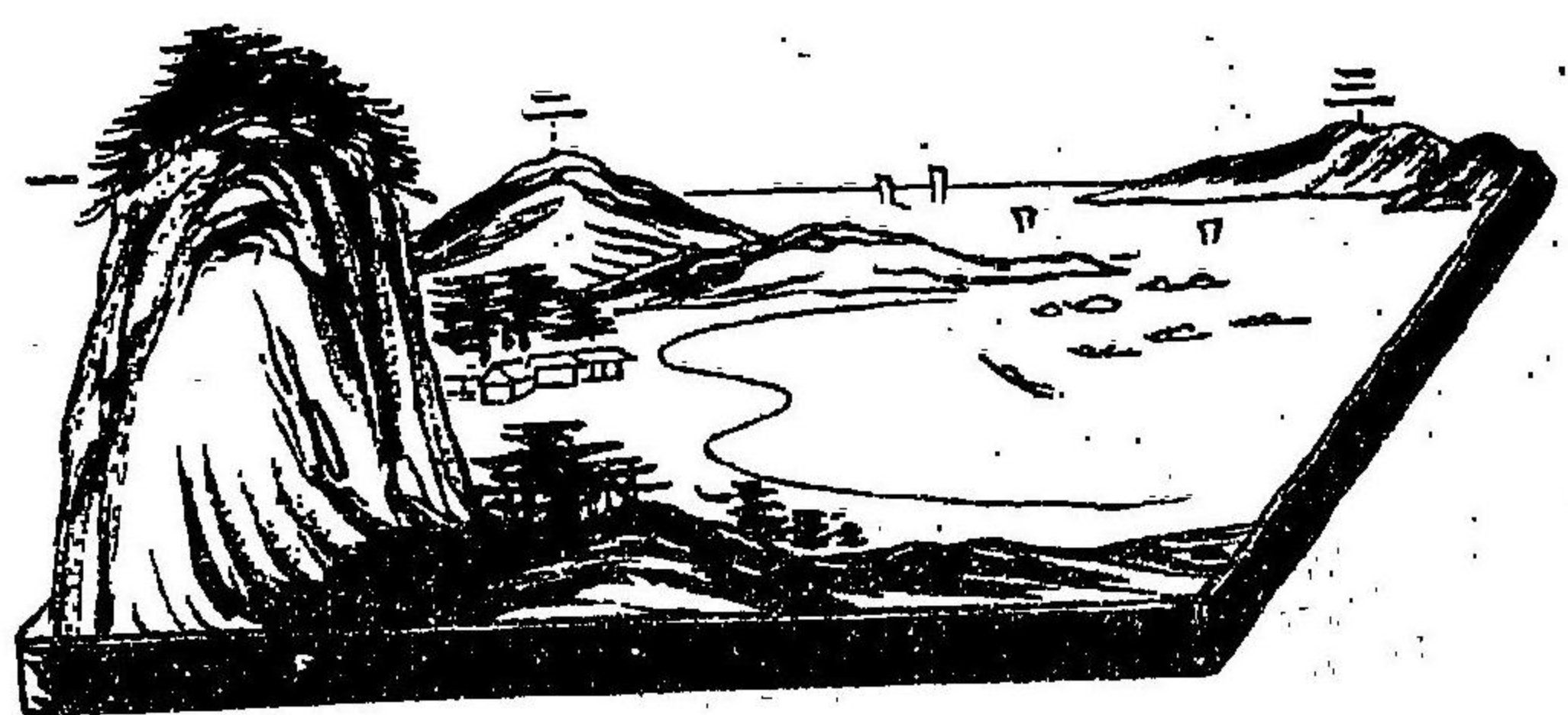
新清水の景



和泉 松ヶ崎濱の景

松ヶ崎の濱の景を造らんとするには、
 圖の如く壹印の山をけとふ土にて造
 り、松、玉杉、杉等を植込み、次に
 二印の山を低くけとふ土にて造り苔
 を附し、壹印と二印との間の岸邊は
 川砂を敷くべく、又三印の遠山は石
 にて造り、遠帆はゴム製のカラ、若
 しくは人造象牙のへゲにて造るべく、
 水面は其鉢盤の色に應じて適宜に御
 影、根岸、天神等用ゆべきなり

松ヶ崎濱の景



攝津 岡本の景

岡本の景を造らんとするには、先づ圖の如く壹印の山を高くけとふ土にて造り、次に二印の岸邊を造るべく、而して山及び岸邊の地こぶに苔を附し、地こぶに植ゆべき樹木は梅林なれば其意にて、黄楊木の如き枝葉の小なるものを撰みて林を造り、其他は松、杜松、杉の類及び槭樹を用ゆべく、三印の遠山は石にて低く造るべし、又人家、舟等は焼物を用ひ、水面は御影、根岸、天神等適宜の小石を用ゆべきなり

岡本の景



丹波 由良川三軒家の景

由良川の三軒家の景を造らんとするには、圖の如く壹印の山を半分程黒崖にて其上はけとふ土にて高く造りて苔を附し、樹木は榉、槭樹等を植ゆ、二印の岸邊は杉、松等に榉を用ひ、三印の遠山は石にて造る、人家、舟等は焼物を用ひて、水面は御影根岸、天神等を用ゆべく、又浪分石は磯崖、黒崖等を用ゆべし

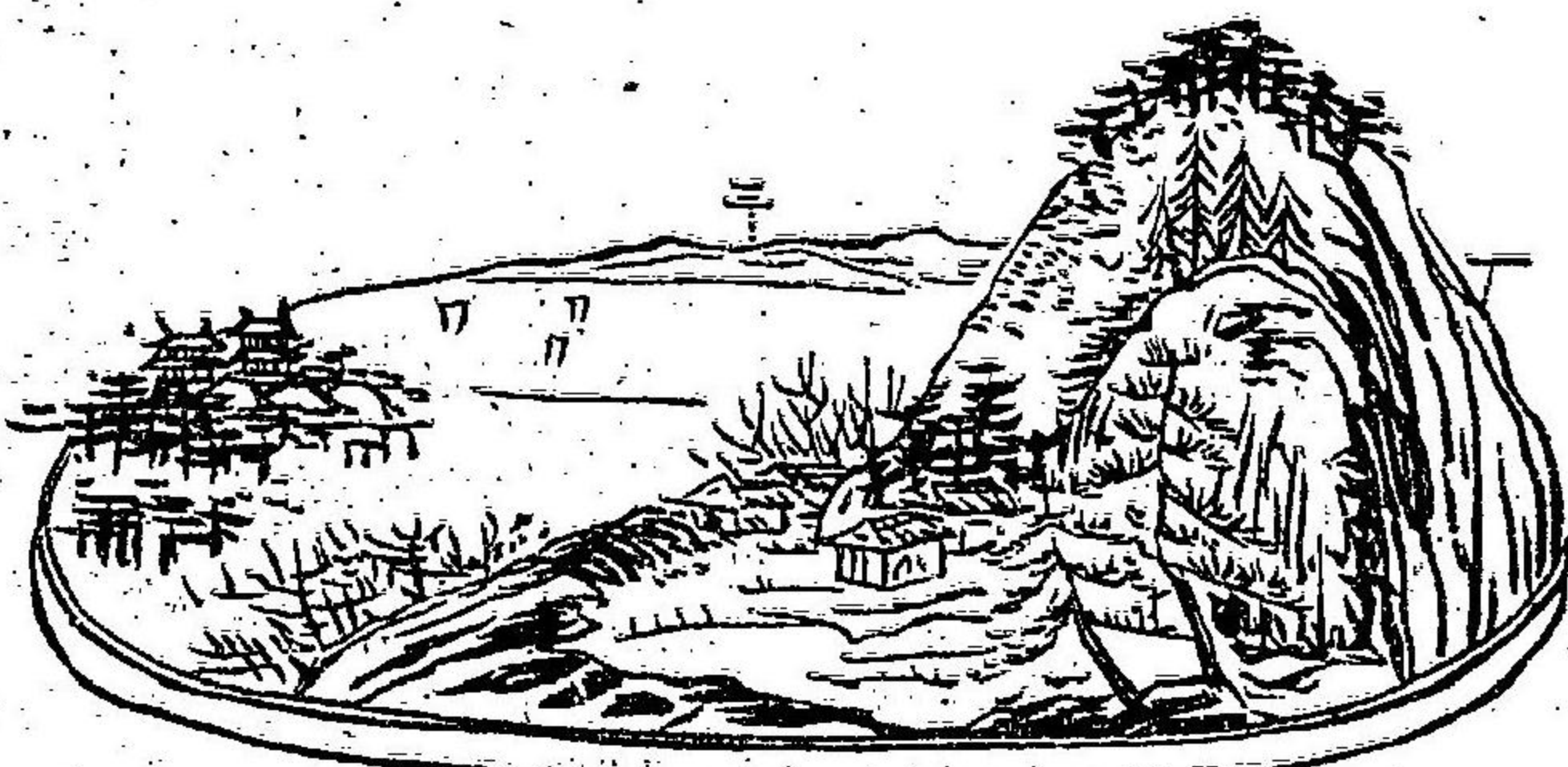
由良川三軒家の景



河内 髪切山の景

髪切山の景を造らんとするには、先づ岡の如く、壹印の山及び岸邊をけとふ土にて造りて苔を附し、道路は川砂を敷き、次に二印の岡を造りて小なる城を置き、又三印の遠山は石にて造る、樹木は松、黄楊木の類を用ひ、城、人家等は焼物を用ゆべく、遠帆はゴム製のカラ、カラス等の不用品にて造り、水面は根岸、御影、天神等適宜に用ゆべきなり

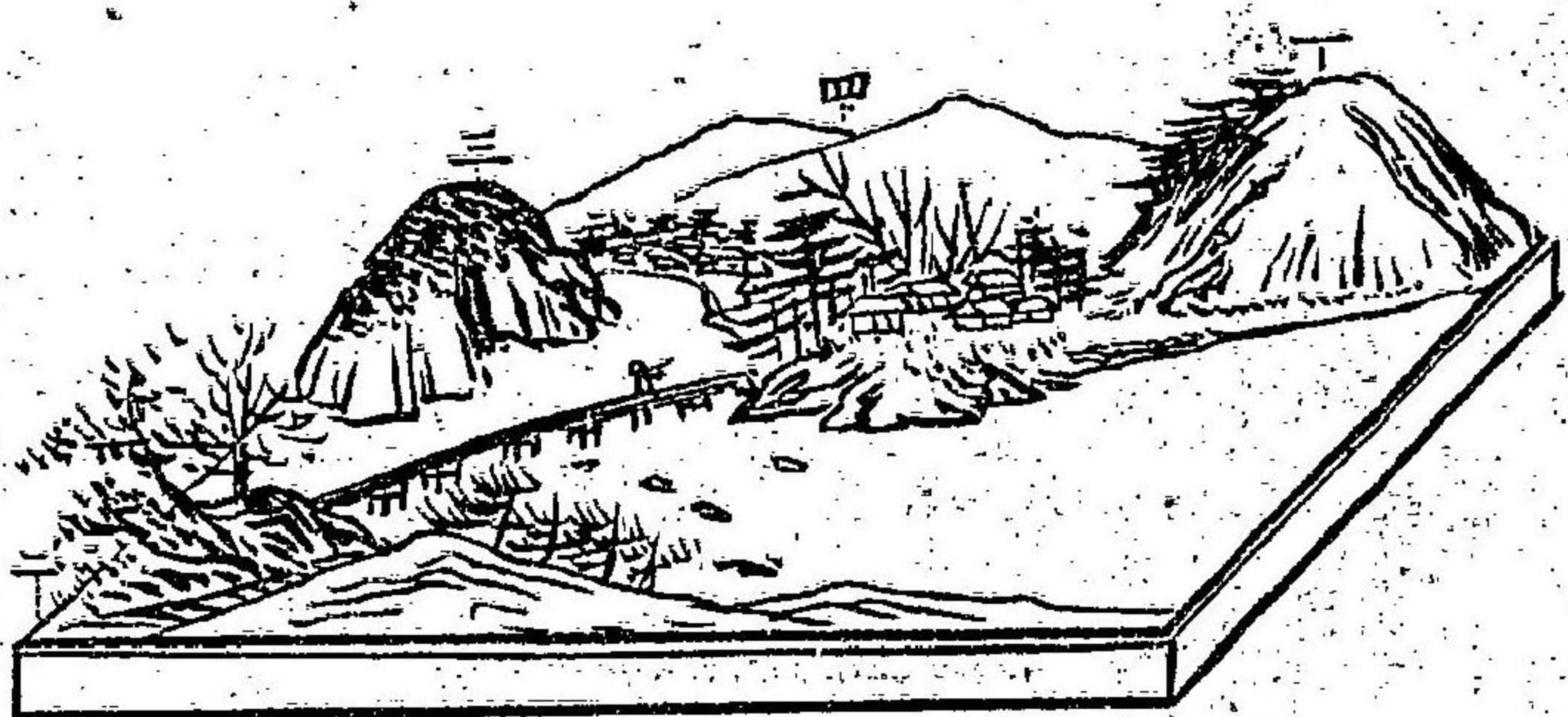
景の山切髪



大和 燕國寺村長與橋の景

燕國寺村長與橋の景を造らんとするには、先づ岡の如く壹印の山及び岸邊をけとふ土にて造りて苔を附し、二印の岡を造る岡の地こぶは高くなし、次に三印の山を造りて四印の遠山に至る、遠山は石を用ゆべく樹木は松、杉、檜、楓等を植込み、架橋は木にて造り、人家は焼物を用ひ水面は天神、根岸、御影等の小石を適宜に用ゆべきなり

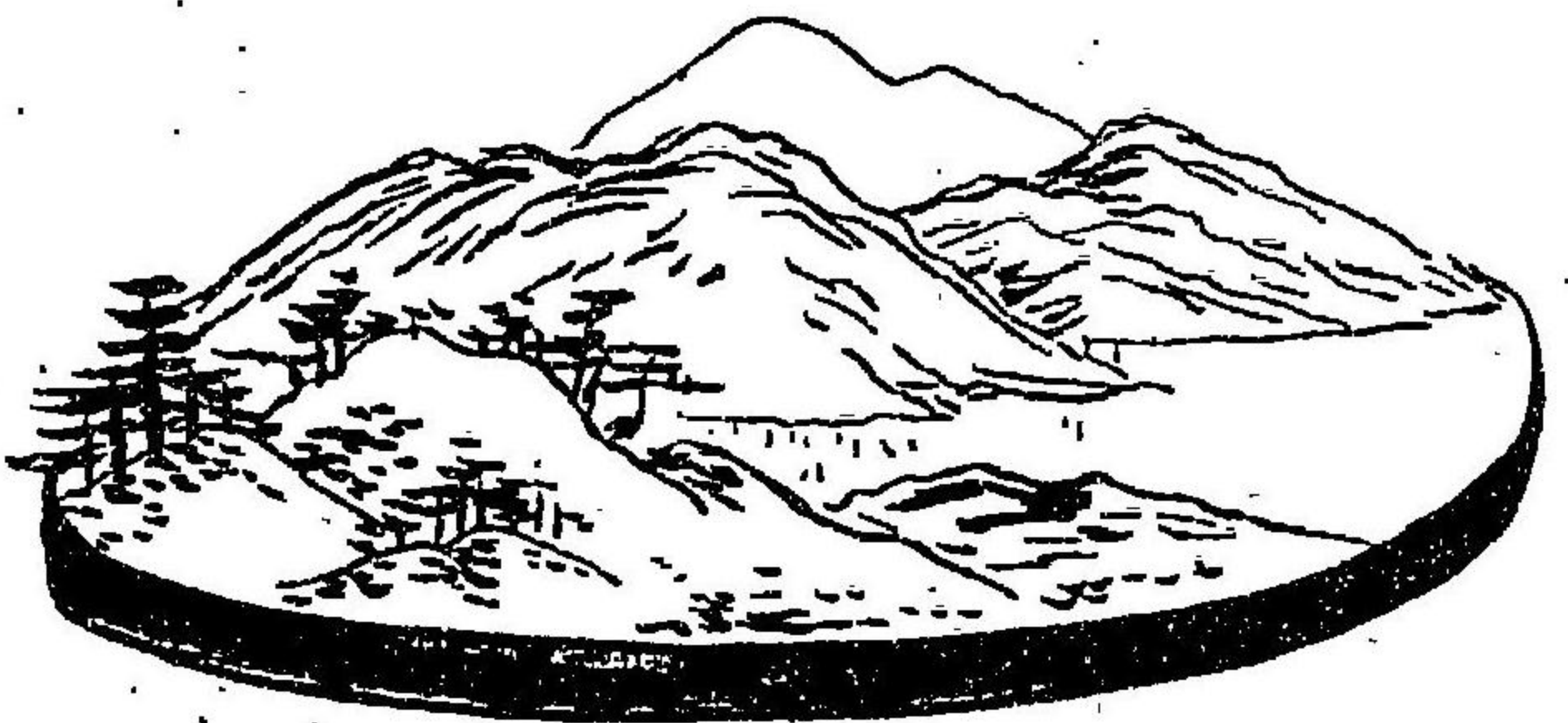
景の橋與長村寺國燕



常陸 筑波山の景

筑波山の景を造らんとするに
 は、圖の如く後面の連山をけ
 とふ土にて造り之れに苔を附
 し、次に前面の山及び地こぶ
 を造りて松、杉等の類を植込
 むべし

筑波山の景



三河 志賀須香の渡しの景

志賀須香渡しの景を造らんとす
 るには、前面の山及び其岸邊を
 けとふ土にて造り苔を附し、次
 に對岸の岡を造る岡には川砂を
 敷くべく、樹木は松、樺、杉、
 檜等を用ひ、家屋は焼物にて
 銅製にて宜ろしく、舟は木製
 にも焼物にて可なり、水面
 は御影、根岸、天神等適宜に用
 ゆべきなり

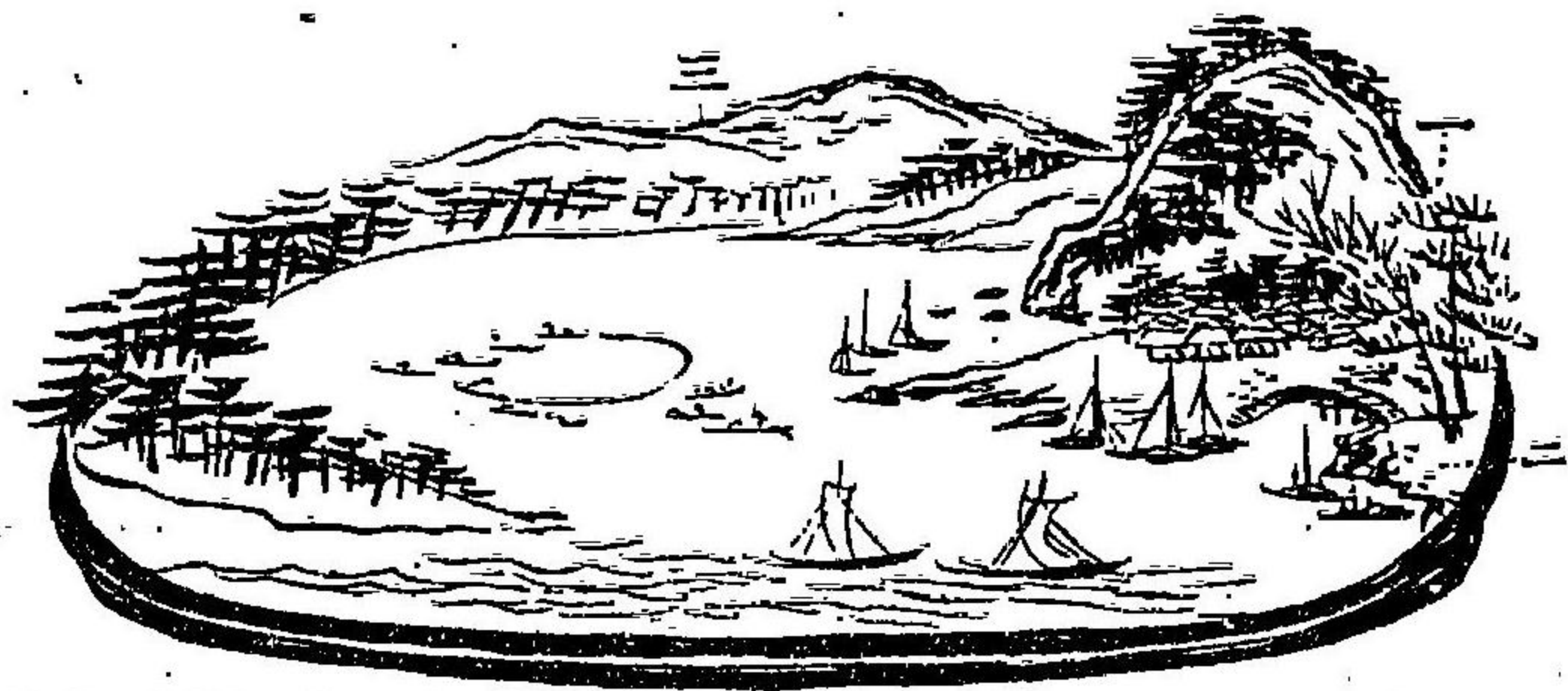
志賀須香の渡しの景



和泉 吹飯の浦の景

吹飯浦の景を造らんとするには、先づ岡の如く壹印の山より岸邊をけとふ土にて造り、次に二印の岡を造る。而して山及び岡を苔を附し山に松杉等の樹木を植へ岡へは榉、檜等の類を用ひて橋を架す。又三印の遠山を造りて松原に至る。橋は焼物にても銅製にても宜ろしく人家、舟等は焼物を用ゆべく、水面は天神、根岸御影等の小石を適宜に用ひて可なり。

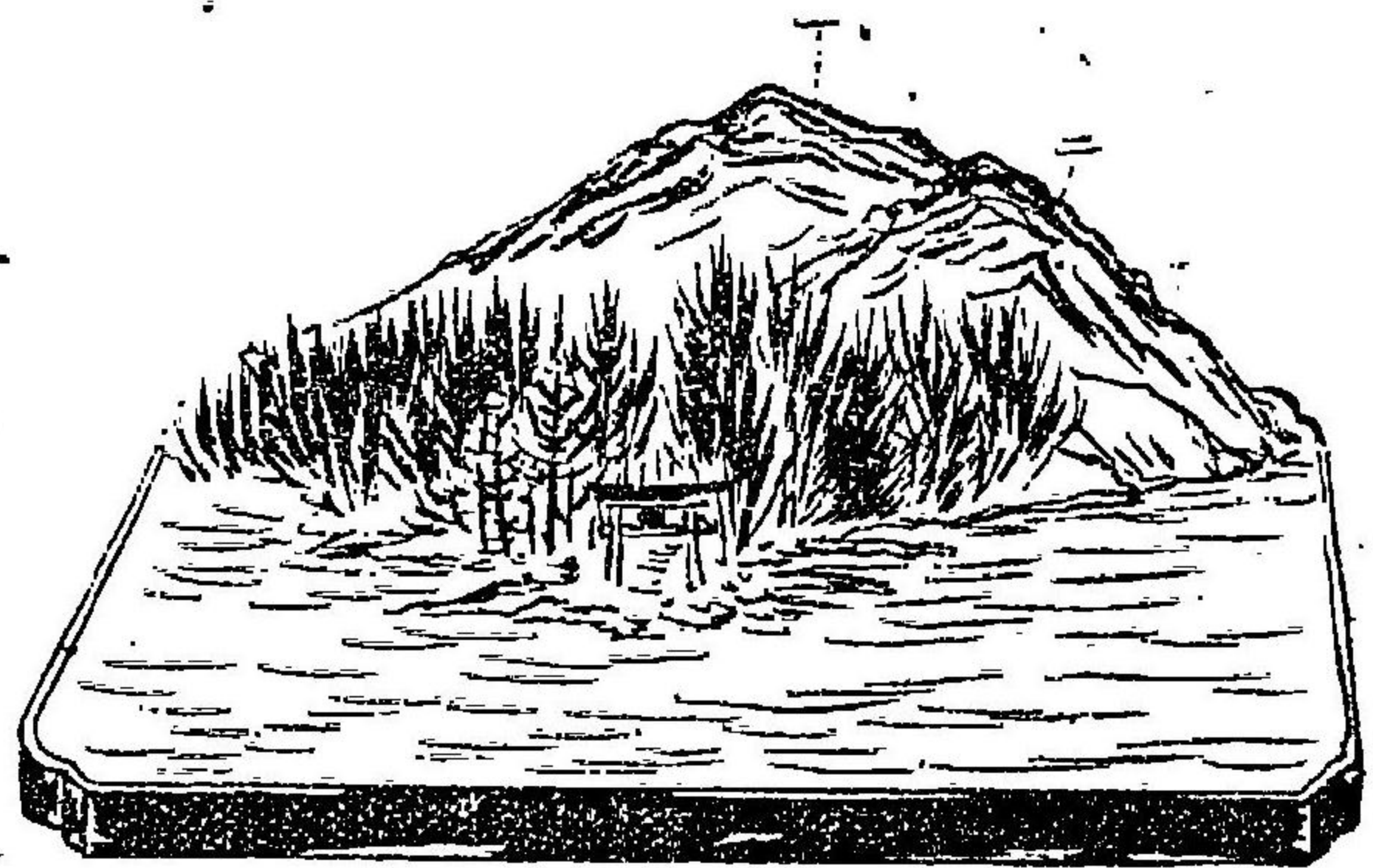
景の浦の飯吹



信濃 芙蓉湖の景

芙蓉湖の景を造らんとするには、圖の如く壹印の山二印の山をけとふ土にて造り苔を附し、而して山下の岸邊には杉の大小を兩側に植込み中央の道路は川砂を敷き其前面に木製の鳥居を置くべし。而して水面は御影、天神根岸等適宜に用ゆべきなり。

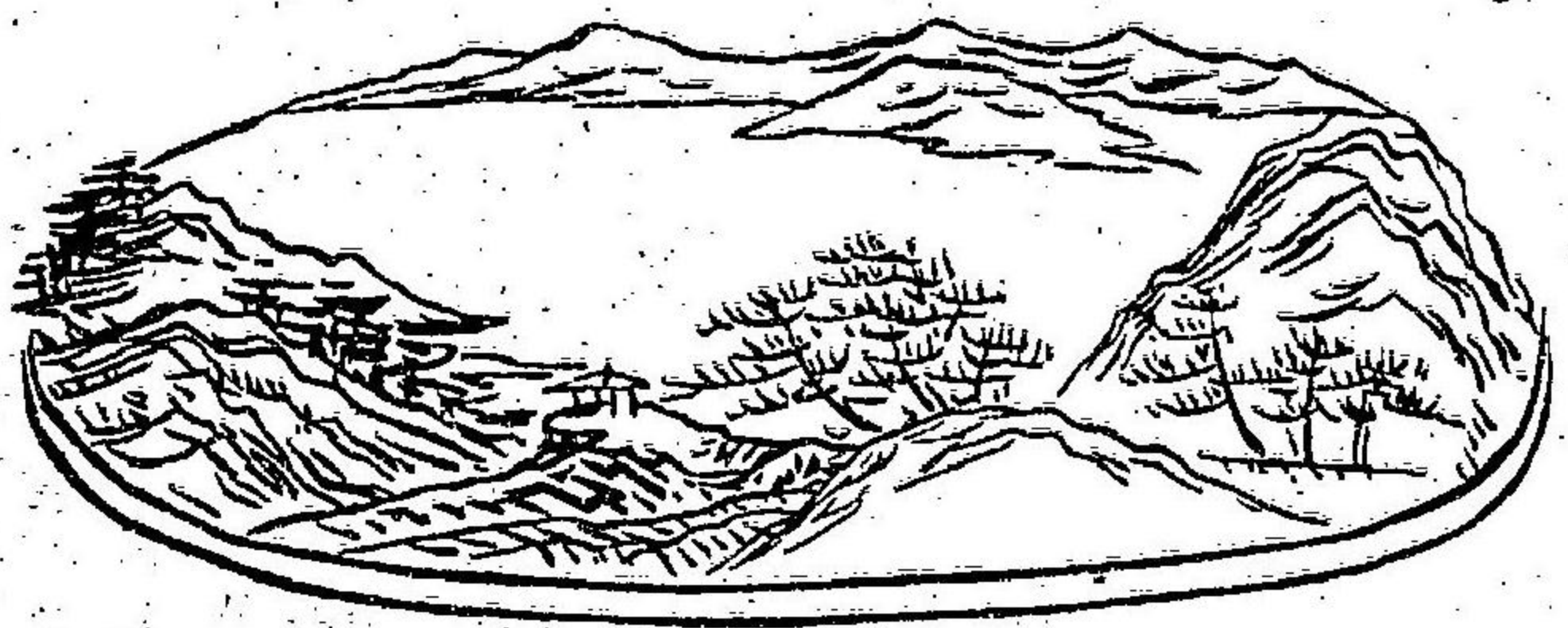
景の湖蓉芙



山城 扇要の景

扇要の景を造らんとするには、圖の如く前面の山及び地こぶを高くけとふ土にて造りて苔を附し、又地こぶの道路は川砂を敷き、樹木は杉、玉杉、松、杜松を植へ、次に後面の遠山を石にて低く造る、而して此景の水面は扇面状をなすべきやふ造ること肝要なりとす、又水面は御影、天神、根岸等其鉢盤の色に應じて適宜に用ゆべきなり

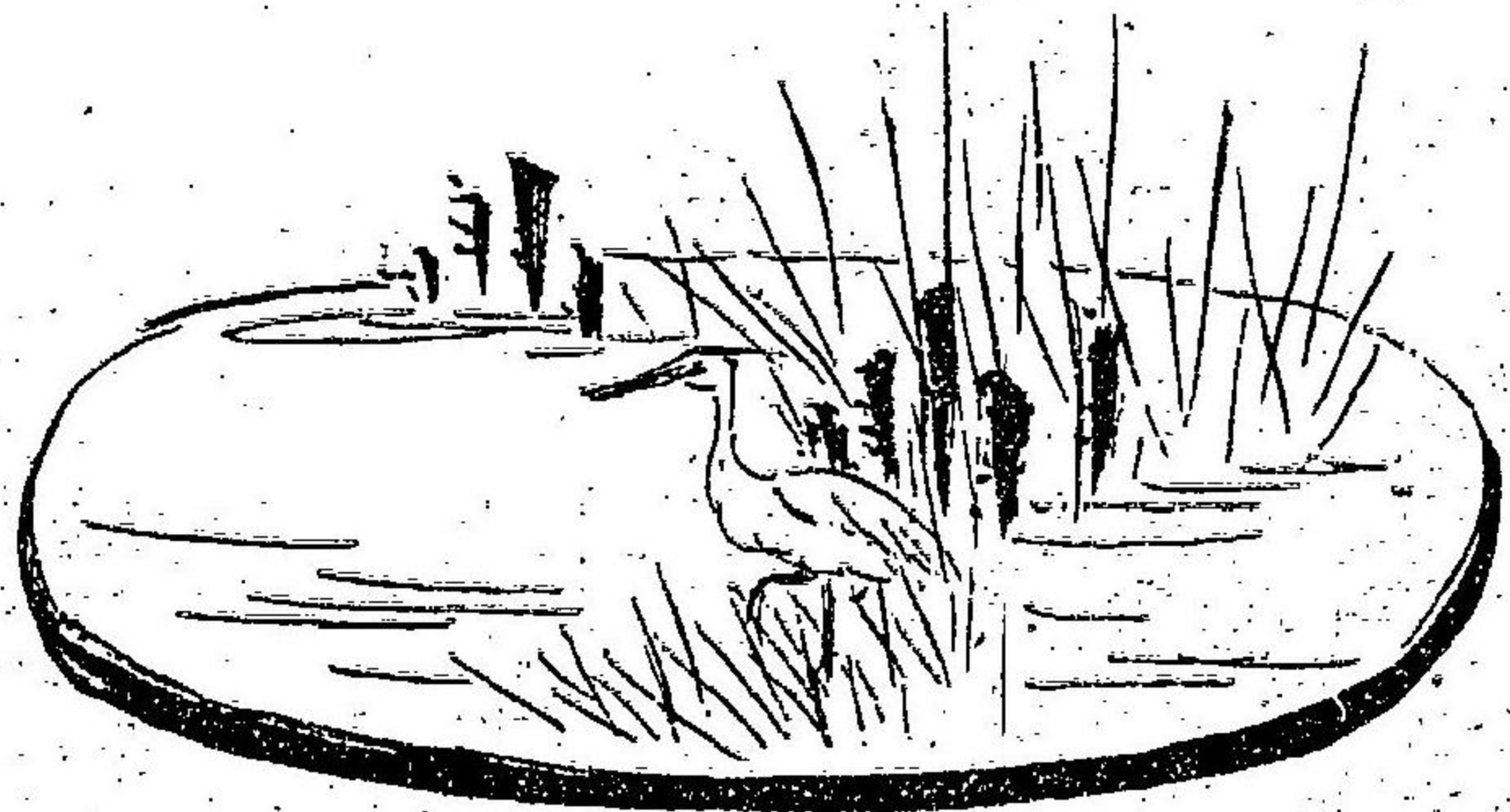
景の要扇



水邊の蘆の圖

水邊の蘆の圖を造らんとするには、先づ蘆を植込み、其傍へ杭を置く、而して杭は能く晒されたる古木を切り採り、杭の根占へ板を打附置きて杭の倒れざるやうになして、適宜の處へ据へ置きて其上へ水面へ用ゆべき小石を敷くべし、又配置すべき水鳥は焼物を用ゆべきなり

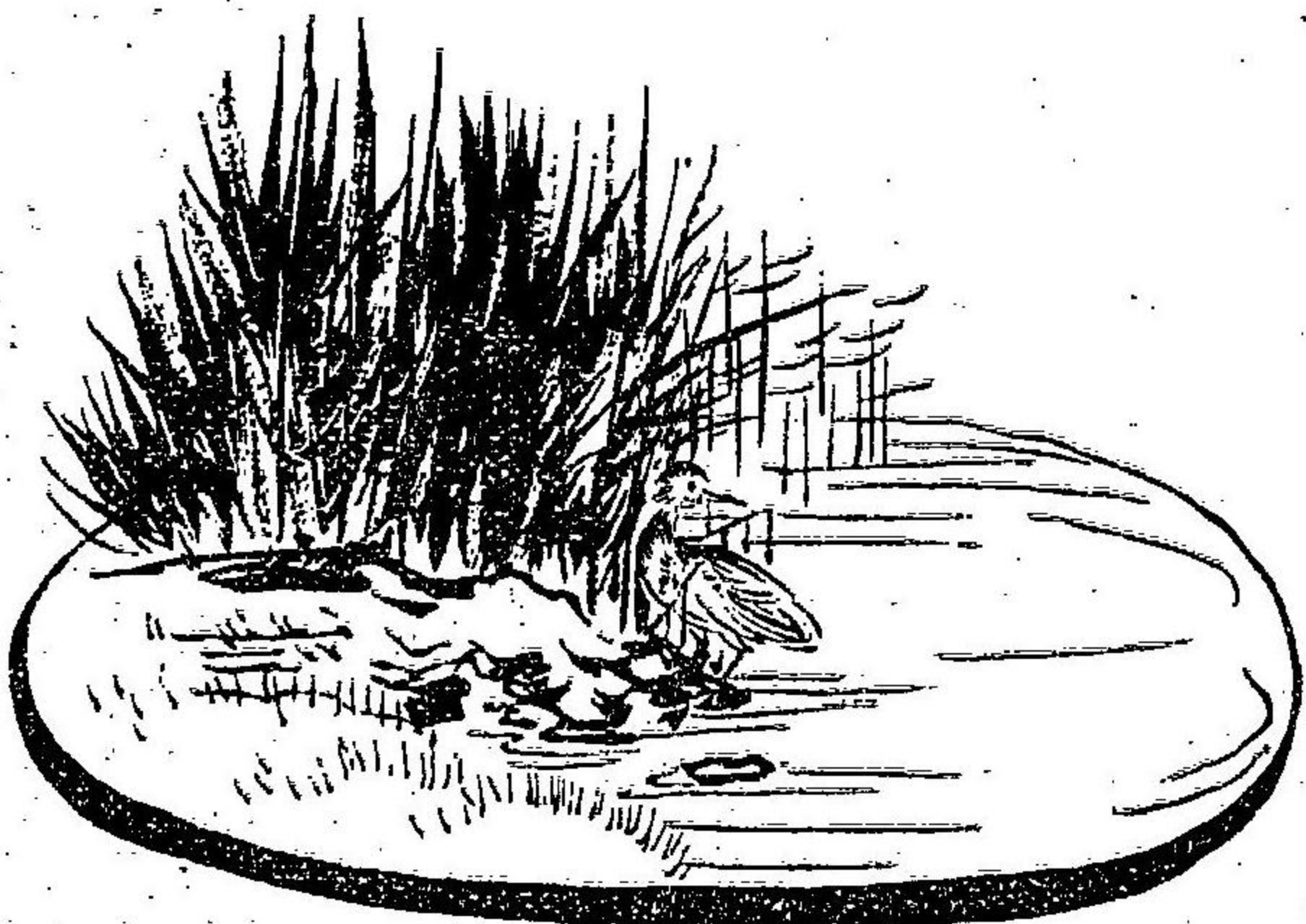
圖の蘆の水邊



澤邊の蘆の圖

澤邊の蘆の圖を造らんとするに
は、圖の如く恰好の良き石を撰
みて置き、其石に續きて地こぶ
をけしふ土にて造りて器を附す
べく、而して蘆は石の後部へ植
込むべし、水面は御影、根岸、
天神等其鉢盤の色に應じて適宜
に用ゆべし

澤邊の蘆の圖



盆景 盆庭 秘訣圖解終

15/40

明治三十六年八月三日印刷
明治三十六年八月七日發行

定價金參拾錢

著者 江原梅松
著者 津川福一
著者 鍛形直太郎
發行者 大橋新太郎
印刷者 野村宗十郎
印刷所 東京市京橋區築地三丁目十五番地
東京市京橋區築地二丁目十七番地
株式會社 東京築地活版製造所

發兌元

東京日本橋區本町三丁目

博文館

柏翁 中島信義君著 (第三版)

盆栽仕立秘法

全壹冊 洋裝大判 木版書入

▲正價金貳拾五錢 郵稅六錢

盆栽は一の小天地なり、即ち數十寸の古柳を尺寸の盆鉢に縮め、或は亭々百尺の森林を寸眸中に培養す、疎影横斜の暗香は以て千春の芳芬を集め、蒼古盤根の木公は以て其緑を榮ふ、悉く是れ盆栽妙味の特色、人生業務の餘暇、盆栽を手づからして、其清香を吸ひ、心神を養は、健康娛樂兩つながら併せ得らるべし、本書は斯道の要冊にして平易圖解を加へ一讀其趣味を了得せしむ請ふ御愛顧あらんことを

順石軒翁著

全四冊和裝上製

益山百景圖

正價金壹圓 郵稅拾四錢

一塊の石、一握の沙、之を盆上に置布して、名山勝地を作る、其妙技自在なるに至りては、觀て圖せざるなく、就て作らざるなし、順石軒翁本書を編して、魂飛神馳の奇觀を示す、蓋し斯道の上乗たるものなり、今や益山の流行、都鄙に盛なり、然れども、之れが師友となるべき良書なきに、獨り本書百景圖を得たるは、斯道の鴻幸といふべし、請予一本を座右に備へよ。

松月庵江刺家空齋君編

茶の湯の大全

全壹冊總編 美本

斯書は茶道諸流に適するものなるも其點前は表千家流を以て編述せり、斯書は茶道點前の手續並に器物の取扱等を述べ専ら後進者の爲め獨習の便に供せり、編述の體裁も文飾を省き専ら平易を旨とし童蒙婦女にも解得し易からしめ茶器に屬するものは(いろは)別とし索引の便に供せり、買價金六拾錢 郵稅八錢

博文館編輯局編(七十版)

茶の湯と花生

全壹冊洋裝大判

極彩色口繪 水野年方君畫
此茶の湯と花生は斯道の大家筆を執り普く古今の書籍を參照して考證自在事理明瞭一たび本書を讀むときは何人と雖も師を求めずして自ら奥義を窮むることを得べしされば茶道の名家松浦伯の序に「茶の道は心のわざにして手の技にあらず」とる法を得れば自ら道にかなふ」と云ひし如くこれには手の技より心の技に入る迄の徑路を順序よく敘述し數百の繪畫を挿みれば手ほどき與許し迄を獨習することを得べし生花の道また茶道と共に精密にして紳士淑女の好師範たるに愧ざる珍書なり
▲定價金貳拾五錢 郵稅六錢

農學士東條秀介君校閱 春夢 江原梅松君著

園藝全書

全一冊洋裝大判 極彩色石版 密圖數葉挿入

▲正價金六拾錢 郵稅八錢

果樹草花 園藝全書

全一冊洋裝大判 有名盆栽盆石寫真版數十葉挿入

▲正價金六拾錢 郵稅八錢

園藝の進歩は是れ社會の進歩なり、花卉や盆栽や造庭や、其高尙にして巧なる時は、社會の嗜好も高尙にして複雜に赴けるは、蓋し衛生的智識の發達したるを証するに足らん、今や人文日圓藝の事茲に於てか世人の目に注目する所となりたり、蓋し園藝は無邪氣にして娛樂の樂たり、又一方に於ては比較的に利益したる、江原氏實験上の要語にして、之を正續二編に分ち、正續二編は専ら露地培養(花壇、團圓、山野)を主とし、續編は盆栽培養法を専叙せり、而して理論を略して實地經驗の栽培法に則り、簡明通俗の文を以て數多の密圖を挿入して以て本文の説明を補ふ、兩編併せ用ゐて始めて園藝の妙技に精通するを得て其趣味と實益との大なる謂ふ待たざるなり園藝者必らず一讀せざるべからず

松浦伯伊藤石黒兩男序文 岡崎淵沖翁著

各傳 點茶活法

全四冊和裝大判 正價貳圓五拾錢 小包送六百文

此書は篇々客法主法手前器物床飾露地茶室等に分ち附するに各傳々統の系譜を掲げ首めは斯道の總論を擧げ茶道は遊戯に非ずして修身齊家の法たる事を辨じ各編毎に亦其事を細論して在る所を知らしめ且つ諸流の傳を列記して其の異同と理論との繩張茶室の構造器各亦一の理を自明せられ師範の人は此書によりて各傳の所在の體格各亦一の理を自明せられ師範の人は此書の參考となること尠からざれば何流何派に論なく凡斯道に志ある者は必一本を座右に備へ置かざるべからざる古來類なき良書なり

榮雲齋先生編

插花大樂抄圖會

全二冊和裝木版美濃紙刷 正價四拾錢

大露庵河村一洗君選

新撰活花圖式

全二冊木版美濃紙刷 正價四拾錢

莊月齋惠一鳥君編纂

插花 四時の詠

全三冊和紙刷上綴大判 正價五拾錢

秀貫齋月一珣君編纂

插花 正風花鏡

全三冊和紙刷上綴大判 正價五拾錢 郵稅六錢

中川龜三郎君 小林鐵次郎君 巖崎健三君合著
圍碁大鑑 全二冊和上綴
 大判二〇〇頁
 ▲正價五拾錢 郵稅六錢▼

十七世本因坊土屋秀榮君校訂 山田權平君著
新撰圍碁錦囊 全三冊和上綴
 小判三一八頁
 ▲正價五拾錢 郵稅四錢▼

七段 小林鐵次郎君遺稿
 初段 小林鐵次郎君編述
碁圍

第七編 ● **圍碁入門**
 故小林鐵次郎君傳入
 本書は第一に圍碁の何物たるを知らしめんが爲め術語と對照して最要なる手段を説明し次に其問題點を設けて練習に供したり是れ入門の捷徑順序たるを以てなり

第二編 ● **圍碁初步**
 之より順次本論に入り前編には極めて卑近なる術語を示すのみにて未だ全般に就き及ぼさずしめて今般高尙なる術語を解釋して首尾全からしめんとを期し總論には碁技の心得を附せり

第三編 ● **圍碁定石**
 定石を圍むことを得るに至れば最早其本道に歩を進めたるものなりされども邪路に踏入り其正式を誤るもの多し死に角此時の注意は斯道の大切時期たり本編詳細に其法則を示して最も懇切を極む

第七編 ● **互先定石集** 卷上
 第五編に示せば實に九牛の一毛に過ぎず即ち定石は通常分ちて置碁定石、互先定石の二つとす前に示せば置碁定石の一分のみ本編に於ては細利を争ひ互に一步も譲らざるの手段を採るものなり其變化の赴く所圖るべからず、玄愈々玄妙愈々妙

第八編 ● **互先定石集** 卷中
 本編には小目に於ける三間夾より一間夾高掛り二間高掛り大斜走掛井に大目に於ける全部を脱しせり互先の妙所は愈々本編に入りて自得する所多かるべし後編に進み所謂碁家の秘蘊悉く茲に完修するを得べし

第九編 ● **互先定石集** 卷下
 本編は目外に於ける高掛下掛及び小目掛四間掛鐵分變體等を就示せり以上互先定石は故小林鐵次郎君(七段)故人杉山博雄(二段)兩氏の遺稿にして小林鐵次郎君の秘藏に係れるものなり

橋本日京東元兌發

全書

全拾部 正價
 一冊五拾錢 郵稅一錢
 八冊五拾錢 郵稅八錢
 一冊五拾錢 郵稅一錢

第四編 ● **圍碁詰方**
 戰術と布陣法とは車の兩輪鳥の兩翼の如し此二者完備して始めて碁に巧なるものといふべし而して此二者中初學者は先づ戰術詰方を修練すべしなり。本編初學者の爲に其捷徑を示さんとし生死斷續等の要道を説明せり

第五編 ● **圍碁布石法**
 本編には非目、六目、四目、五先の布石法を懇示せり而して八目、七目、五目等は大同小異なるを以て之を略せり五先の石立は碁客の重視する所なるを以て編者特に深く注意し前半は古風の精を摘み後半は現代の粹を抜く

第六編 ● **古今名家打碁集**
 本編は年代順序にて本因坊歴代の系統并に圍碁手段の進歩變遷等を記せり是れ同家は世々名人の技倆ありしものにして其打碁は實に斯道の精華なるを以てなり總論には毎回對局者の出所、経歴及物語等を略記せり其參考に資する所甚多し

第十編 ● **近古名人打碁集**
 本書は正保の昔より寛政の末年に亘れる百五十餘年間に於ける名匠の打碁を選擇し正しく年代を追ひ順序掲載せるものなり載する所の棋譜は棋聖道策のもの最も多く元丈知得の對局之に次ぐ

第十一編 ● **近世名人打碁集**
 一編 本書は享和元年より安政年間を跨る五十餘年間の名匠の打碁を選擇し秩序的に年代を追ひ編纂したるものにして此時代は斯道極盛名人上手輩出せしかば隨つて打碁の數も又極めて多し其内百五十手以上の非局は百手毎に二回以上に分載し以て研究に便せり

第十二編 ● **今代名人打碁集**
 第十八世本因坊秀甫氏の青年時代より其没年明治十九年に至る約三十年間の打碁五十二局を撰りして順記したるものにして其棋譜は秀甫氏のものせるもの最多し是れ同氏は斯道の牛耳を執りし偉人にして其打碁は今代碁界を代表したるものなればなり

本町三丁目 博文館

六段 大澤銀次郎君編 田村晉兵衛君補輯
碁獨稽古 全三冊和裝
 小判百七枚
 ▲正價參拾五錢 郵稅六錢▼

方圓社員 六段 大澤銀次郎君編
碁獨習案内 全三冊和裝
 小判百一枚
 ▲正價參拾五錢 郵稅四錢▼

(五)

博文館發兌將棋書類

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|--|--|--|---|--|--|--|---|--|--|---|---|--|--|--|--|--|--|
| 大橋宗英君著
●新將棋步式(組駒)
全二冊和並綴小判五九枚
正價拾四貳錢 | 大橋宗英君著
●將棋早指南(組駒)
全二冊和並綴小判六三枚
正價拾四貳錢 | 大橋宗英君著
●將棋早學(組駒)
全二冊和並綴小判七二枚
正價拾四貳錢 | 大橋宗英君著
●將棋軌纂(方指)
全二冊和並綴小判八〇枚
正價拾四貳錢 | 大橋宗英君著
●將棋奇戰(方指)
全二冊和並綴小判九一枚
正價拾四貳錢 | 伊藤宗君著
●將棋絕妙(方指)
全二冊和並綴小判八〇枚
正價拾四貳錢 | 大橋宗英君著
●將棋明玉(方指)
全二冊和並綴小判八五枚
正價拾四貳錢 | 大橋宗英君著
●將棋輝光(方指)
全二冊和並綴小判七六枚
正價拾四貳錢 | 福島順基君著
●將棋絹節(方指)
全二冊和並綴小判六五枚
正價拾四貳錢 | 福島順基君著
●將棋獨稽古(方指)
全二冊和並綴小判五五枚
正價拾四貳錢 | 大橋宗英君著
●將棋妙手(方指)
全二冊和並綴小判五七枚
正價拾四貳錢 | 大橋宗英君著
●將棋粹金(方指)
全二冊和並綴小判八九枚
正價拾四貳錢 | 伊藤宗印君著
●將棋手鑑(合手)
全三冊和並綴小判一〇六枚
正價拾四六錢 | 伊藤宗印君著
●將棋玉手箱(合手)
全二冊和並綴小判六二枚
正價拾四貳錢 | 大橋宗英君著
●將棋養真圖式(手詰)
全二冊和並綴小判九〇枚
正價拾四貳錢 | 伊藤宗印君著
●將棋精妙(手詰)
全二冊和並綴小判七八枚
正價拾四貳錢 | 大橋宗英君著
●將棋新選圖式(手詰)
全二冊和並綴小判八二枚
正價拾四貳錢 | 桑原君仲君著
●將棋極妙(手詰)
全二冊和並綴小判七九枚
正價拾四貳錢 | 伊藤宗印君著
●將棋圖巧(手詰)
全二冊和並綴小判八三枚
正價拾四貳錢 | 伊藤宗印君著
●將棋玉圖(手詰)
全二冊和並綴小判八〇枚
正價拾四貳錢 |
|---|---|--|--|--|---|--|--|--|---|--|--|---|---|--|--|--|--|--|--|

大和田建樹先生著(第八版)

增補 諸曲通解

全壹冊

▲背皮洋製 大判美本 正價壹圓八拾錢
金字入紙數千八百頁 小包送六百文

其文は自然、其意は幽玄にして神韻の掬すべきは、謠曲にありとは大和田先生の持論なり。而して先生が謠曲文學の紹介者として、獨特の手腕を有せらるるは、世人皆之を知れり。此書は現存の謠曲を悉皆網羅して、註釋を附し、妙處を示すこと丁寧反覆、而して専ら通俗を主とす、一讀以て神道佛法を學ぶべく、以て歴史故實を暗すべく、以て詩歌文章を知るべく、以て名所舊跡を探るべし

幸田露伴先生校訂(新刊)

校訂 狂言全集

全參冊

▲中判和裝綴美本 一冊 正價金五拾錢
一冊紙數約四百頁 郵稅八錢

此は、和泉大藏の二流を纂めましたる物で御座る、昔より狂言の書物もいろいろ御座るが、流派が區々で御座るに依て、たゞ一部の書物だけで、他流の事を知ることが出来ぬ。其上、冊數も多く御座れば、携帶にも不便で御座る。左様に御座れば、此書は、兩流を併せ知り又對照することも出来まするやう、和泉流を基とし、大藏流の同じものを加へ、校訂は幸田先生に乞ふて嚴密に、書は清親畫伯に囑して精巧に、態裁又意匠を凝した古風の美本で、携帶にも都合よく御座る程に、狂言は、極めて必用なる書物で御座る、敢てお勧め申す、はや／＼御買へ候へ

上卷……(狂言記)(製本既成)
中卷……(續狂言記)(製本既成)
下卷……(狂言記拾遺五十番)(近々發行)

能

の

栞

全部六册中判和綴石
版表紙能舞袖巧木版表挿入
正價 一册四拾錢 三册壹圓拾五錢
全部紙同廿錢 郵税一册四錢

能を解ふ人は、あれども能を知る人は少なく能を見る人はあれども能を解する人は少なし此書一度出なば知る事も審に解せることも迷かなるを得ん斯道の爲めの舟筏とも燈火ともなるべきは獨り此書か

大和田建樹先生著

既刊

能の種類、役者、地謡、下分、舞臺と橋掛、形位と緩急、中入と物着、次第、名乗、笛、一聲、出方、早笛、大燈籠、下羽、來序、亂序、あしらひ、出し、早鼓、祝詞、舞、舞臺、相、所作、立廻、小道具、若の形、囃子と仕舞

一の卷

○翁○高砂○八島○東北○盛岡○津
舞慶○三輪○兼平○羽衣○安宅○安
達々原○蟻通○田村○江口○百島○
龜々

二の卷

○竹生島○清柳○熊野○隅田川○融
○都那○鉢木○巻絹○俊寛○海人○
小治渡○夜討曾我○杜若○花屋○鞍
馬天狗

三の卷

○養老○忠度○松風○七騎落○山姥
○橋舞慶○春榮○道成寺○富士太鼓
○土蜘蛛○四王母○龍○草子洗○唐
松○紅葉時

續刊

四の卷

○加茂○巴○三井寺○炭上○烏帽子
折○葛城○小袖曾我○堀川攝待○野
守○花月○智盛○景清○放下僧○望
月

五の卷

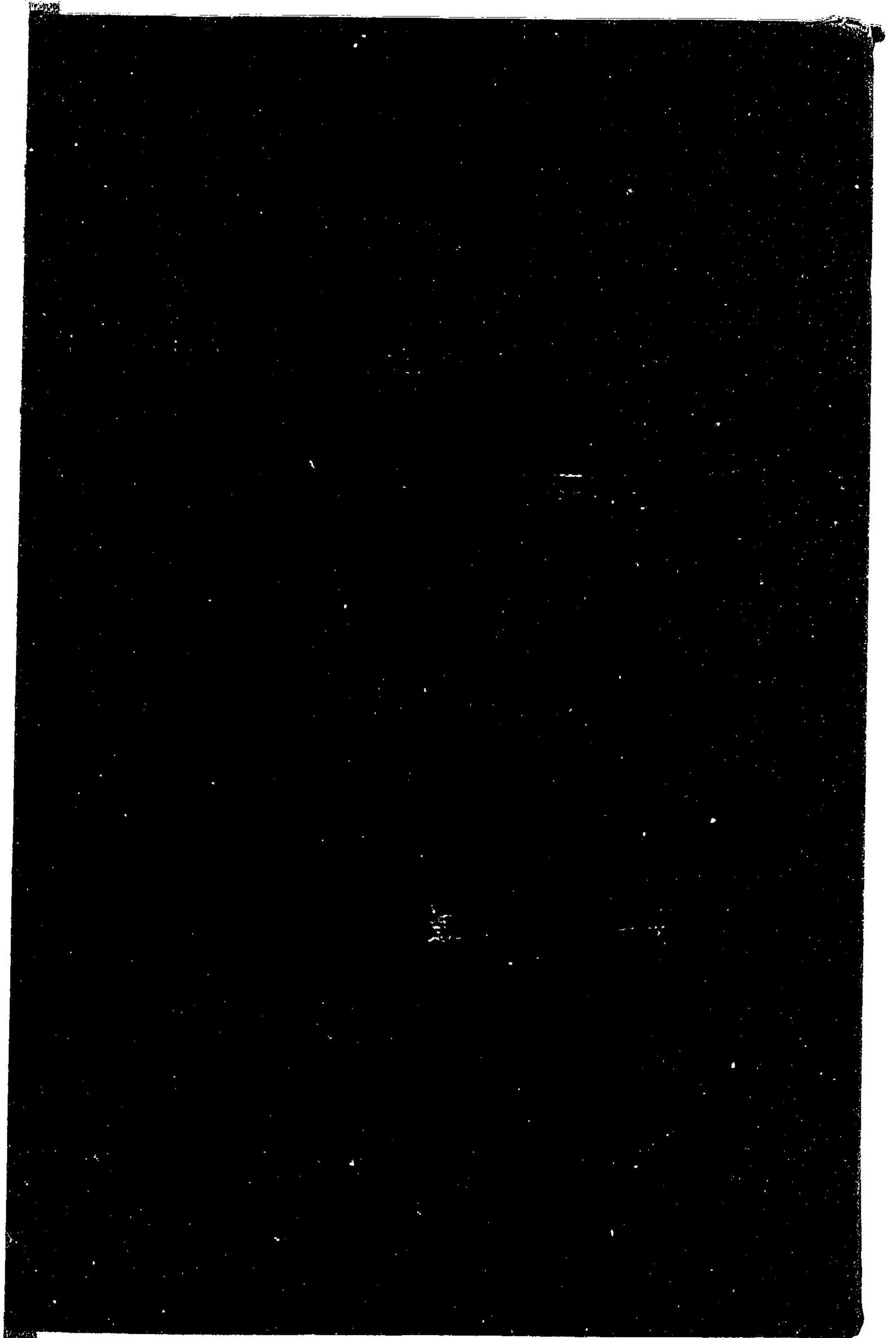
○嵐山○敦盛○二人靜○雲雀山○殺
生石○小督○頼政○非岡○熊坂○善
知鳥○項羽○盛久○住吉詣○柏崎○
總上

六の卷

○龍田○朝長○碓○阿清○善界○國
柄○弱法師○大原御幸○蟬丸○織田
○大佛供養○疵女○藤月○大江山

發兌元 東京本町 博文餘

77
197



076038-000-6

77-198

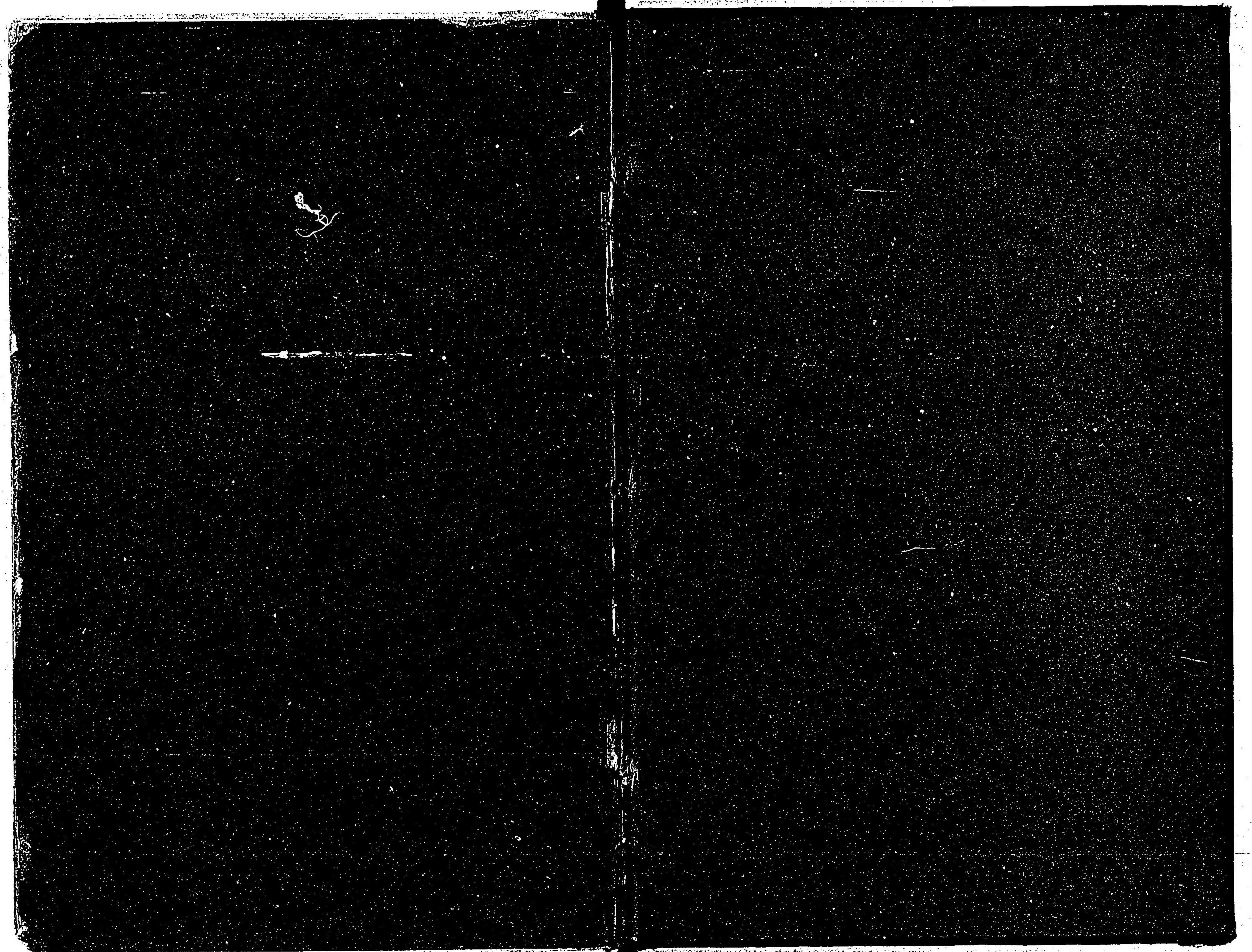
盆景盆石盆山盆庭秘訣図解

江原 春夢 (梅松) / 等著

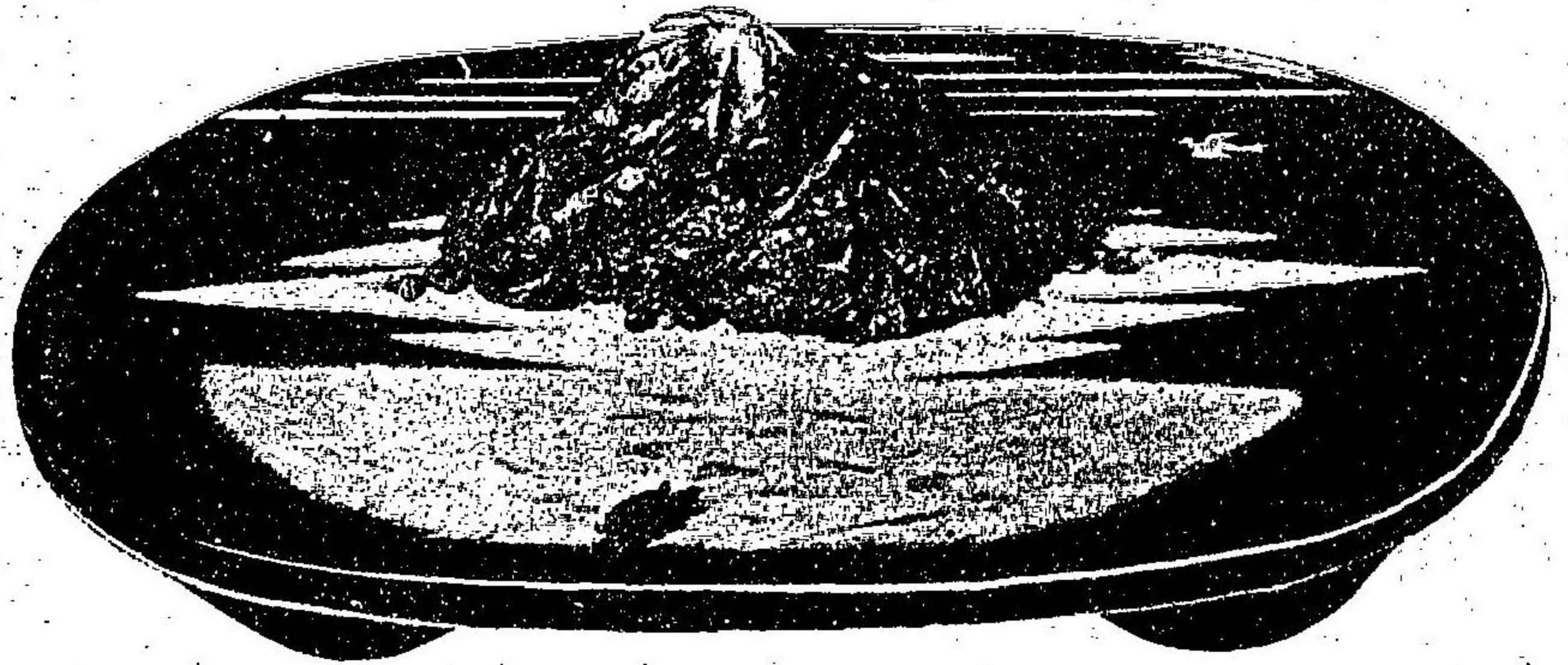
M36

CEO-0214





景 盆



山 菜 蓬



川 野 吉

目

次 終

山城扇要の景 三〇

水邊の蘆の圖 三一

澤邊の蘆の圖 三二

目次

八